

東方紅月録

黒薔薇ノ夢@吸血鬼好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

スカーレット家の三女・四女として生まれた双子。

リリエラ・スカーレット（璃々^{リリエ}）と、

ルリア・スカーレット（瑠璃^{るり}）は何を見て、何を感じ、何を思うのか。

※処女作。視点がコロコロ変わります。酔うなよ！

更新は不定期。でも一月に一話は頑張る。

時々甘々砂糖展開ありま…す？（多分）

「キャラ紹介」「珍しい日と変わらぬ環境」は飛ばしていただいで大丈夫です。たぶん。

追記（3月22日現在、週一更新頑張ってます）

目次

記憶が語るもの	
君には何が見える？	Memorie
そしてその日はやってくる。	Mem
鏡は正直であつた。	Memorie
幸せはこうして始まつた。	Memor
これは記憶に過ぎないのか？	Mem
忘れるものはあなたです	Memor
いつかは過ぎる、分かつてる。	Memorie
彼女たちの日常。	Memorie
記憶Ⅱ大切なモノ	Memorie
珍しい日と変わらぬ環境	Memorie
珍しい日と変わらぬ環境	Memorie
始まりは終わりへ。終わりは新たな始まり	Memorie
キララ紹介	Memorie
珍しい日と変わらぬ環境	Memorie
後編	Memorie
中編	Memorie
前編	Memorie

りへ。

少女たちは一步踏み出した

156

未来はすでに始まっている。

171

実はすべては……

179

道は何処へつながっているのだろうか

183

始まりを告げるのは貴女。

187

嘘は積み重なって今に至る。

193

これから始めよう、私たちの物語を

214

忘れることはできなくてもいい、進も

う

218

「旅は道連れ世は情け」かもしれない。

辿り着いた先には次の壁が立ちはだか

228

るんだろう

240

探しものは何処に

誰でも救いを求めているならば

前編

247

誰でも救いを求めているならば

後編

254

望めば望むほど、願えば願うほど。

267

何故叫ぶのか、まだ誰も知らない。

277

キャラ紹介

part 2

284

記憶が語るもの

君には何が見える？

M e m o r i e s
1

？リリエラ視点く

……………？

「……………リ……………ラ」

「…え……………リ……………ラ」

「……………リリエラ！」

目を開けると目の前に誰かがいる。
なんだ、さっきのは夢か。

誰だろう。

光が見えなくて邪魔だなあ。

「私がミルクあげるの！」

「ふらんがやるー！」

いつも通りの二人の喧嘩だった。

「はいはい、私がやるから。」

「お母様ずるい〜！」

「ごらごら。二人は下がっていなさい。」

お父様が部屋に入ってきた。

「お父様！お疲れ様！」

お仕事を終えられたのだろう。

それよりご飯ほしいなあ。

声を出せないのがこういう時つらい。

すると今度は双子の妹であるルリアの声がした。

私は双子の姉。

「うー。みるくー。おかあさまあ」

「お母様、ルリアがよんでるよ。」

いいなあ、ルリア。

「お母様、ルリアは喋れるのにリリエラがしゃべれないのはなんで？」

そう、私は喋れない。

もう生まれてから3年たつのに。

喋れないだけで。動けるよ!?

お父様が話し出す。

「実はな、スカーレット家の双子には呪いがかけられているんだ。最初は、迷信だと思っていたんだが……」

「どんな呪いー?」

「私も気になるわ!」

勉強好きな二人が同時に聞く。

息びったりだね、と言いたい。

「例えば、この二人のように、喋れなかったり、

動けなかったりするんだ。」

「へえー!」

なんだ、それだけか。

え？それだけ？病気かなんかだと思ってたよ!?

「あー。」

私は、こういう声は出る。でも、話すことができないのだ。

妹であるルリアは動くことができない。

私は動けるだけマシか。

「さあさあ、レミリア、お前は勉強の時間だ。」

お父様はこれ以上話したくないかのように話を変えた。

いつも通り、大図書館に行くようだった。

私も今度また連れてってもらおうかな。

「ふらんもお勉強してみたいわ、お父様！」

「ああ、いいだろう。フランも来るといい。」

「フラン、よかったわねえ。」

「前から私としたいって言っていたものね！」

「うん！」

あれ、ご飯のこと忘れてる。

「あー。お〜」

これ以外言えない。やっぱりなんか悔しい

「お母様、リリエラがよんでるわ。」

「よしよし、ちよつと待って頂戴ね。」

レミリアお姉さま、気づいてくれてありがとう…

というかよくわかったなあ。

「さあ、レミリア、フランドール、行くぞ。」

「はあーい」

「バイバイ、ルリア」

「またね、リリエラ。」

三人は部屋から去る。私もまた今度、大図書館に行きたいなあ。

あの大量の本の中に埋もれているとなぜか幸せになる、そんな気がする。

…さすがにあれを読もうとは思わない。

なんかやばそうな本がたくさんあったからだ。

静かになった部屋の静寂を破るようにお母様が言う。

「さあ、全部食べてしまつてね。私も忙しいの。」

「うんー」

ルリアがうらやましい。

「そういえばもうすぐ、ね。」

何がもうすぐだというのだろうか？

「お母様、なにがもうすぐ〜？」

「いいえ、なんでもないわ。」

もうすぐ…といえは、

誕生日がくるのではないか？

ん？誕生日？のろい？んん〜？

そういえば、なんで私はまだ三歳くらいなのに、
こんなに考えることができるんだらう？

本は絵本しか読んだことがないのに、なぜわかるんだ？

なぜ…？

お腹いっぱいになったせいだろうか。

どんどん思考に霧がかかりはじめた。

眠くなり、瞼を閉じた…。

そしてその日はやってくる。

M e m o r i e s
2

くりりエラ視点く

あれから同じような日々が十カ月と四日過ぎた。

私は、お姉さまと一緒に大図書館に行ったり、

夜のお庭をお散歩したり。

そして、

今日は、《呪いの解ける日》。

私の、いや、私たちの誕生日。

私からは、『話す能力を奪う』呪いが。

ルリアからは『動く能力を奪う』呪いが。

嘘のように解かれるという。

話すことと動くことって、能力だっけ？

「リリエラができることは、『物事・形を操る』事、ルリアができるのは、『光と闇・色を操る』事。」

この前、お父様がそう言っているのを聞いた。

兎に角、明日は儀式。

早く寝よう。

コンコン

ドアがノックされる音で目が覚めた。

メイドが入ってくる。

「リリエラお嬢様、おはようございます、

今日は儀式でございますよ、準備をいたしましょう。」

外を見ると、もう真っ暗だった。

だが、月は見えない。

雨が降っているのである。

…なんか怖い。

儀式の為に、専用のローブを着て、家族に連れられ、館の奥の間へと向かう。

ちなみに私はお父様の書齋で館全体の地図をお借りしてきた。ルリアにも見せてあるので彼女も知っているだろう。外は大雨になっていた。

こんな季節に降るのは珍しいといえるだろう。

しばらく進むと、とても頑丈そうな扉があった。

鍵や術式をひとつずつ解いていく。

この儀式が終われば、呪いは解けて、喋れるようになり、吸血鬼として血をのむことが許されるという。

…血はいらない。

「ここから先は私、リリエラ、ルリアだけで行く」

そうお父様が告げる。

「私も行くわ!」

「いいえ、レミア、フランドール、あなたたちはここにいなさい。」

お母様がそう止めた。

「なんで!?!」

と、フランお姉さま。

「…フラン、だめよ。」

とレミアお姉さま。あきらめたのだろうか。

「なんでなの!?!」

「フランお姉さま、まってて、ね?」

ルリアのまだあどけなさの残る言葉。

納得したのか、フランお姉さまがこう言う。

「…かならず、かえってきてね。」

「いつてらっしゃい、リリエラ、ルリア。お父様も。」

「ああ。…さあ、ふたりともいくぞ」

お父様の後ろについて歩く。

ルリアは動くことができないからお姫様抱っこされている。埃を被った絨毯の道をしばらく歩くと。

薄暗い部屋にたどり着いた。

お父様が戸を開ける。

一つの机がある。

その机の上には手の形の窪みが付いている。

お父様が小さな小瓶の入った木箱を持ってきた。

ふいに暗くなる。ランタンの明かりを消したのだろう。

…目が慣れてくる。

床には紅い放射線状の筋が残っている。

今から、儀式が始まるようだ。

「リリエラ、真ん中の台が見えるかい？」

みえる。

「見えたらそこに行ってみろ」

恐る恐る近づく。

置いてある椅子に座る。

「おとうさま、るりあは〜?」

「少し待っていなさい、ルリア。」

「はあい。」

お父様がこつちに歩いてくる。

「とう……あ……」

「リリエラ、怖くない。さあ、台に手を置いて。」

窪みにはめる。すると、上に布がかぶせられる。

その布は緋色に染まってしまっている。

もとは純白のシルクでできた布だろうか。

「怖いのなら目をつむりなさい。」

怖い。でも、目を閉じると余計に怖い。

一度つぶった目を開く。

それを見たお父様はこう言う。

「度胸のあるやつだ。それなら、手を動かすなよ。」

「3・2・1・ほい。」

いや、ほいってなんなんだ…

「あつ…」

途端に五本の指に激痛がはしる。

針か何かが刺さっている。

何かがしずくの滴るような音を立てる。

机の下を見ると、紅い筋を通って壁へと流れていく。

一分くらいたっただろうか。

痛みがふつと消えた。

「終わったよ。部屋の外で座っているルリアを連れてきてくれ。」

そういつてお父様がほほ笑む。

扉を開けると、壁にもたれるように座っているルリアがいた。

無言でおんぶする。

そして、さつき自分が座っていた椅子に、ゆつくりと座らせる。

「外で待っていないさい。」

…三分くらいたった時。

ふいに扉が開いた。

ルリアは、今度はおんぶされている。

「さあ、かえるぞ。」

またしばらく歩く。無言で。

行きよりも体が軽い。気がする。

動きやすい。

だんだんと明るくなる。

出口の扉が見えた。

あのおもい扉を開けると。

「おかえりー！リリエラー！」

フランお姉さまが突進してきた。

「ん〜！」

首絞まってるんですが!?

「おつかれさま、ルリア!」

「ただいま、みんな。」

みんながいた。

「大広間へ。それと二人は今日から正式にスカーレット家の娘だ。」

「二人とも、ローブを脱いで。」

お母様にローブを渡す。

「よかったね、お姉さま!」

フランお姉さまとレミリアお姉さまだ。

「ええ、ほんとによかった。」

「リリエラ、まだ喋らないで。ルリアも動いたら駄目よ。」

そうだ、儀式が終わったから喋れるのか!

忘れてた!

大広間にはごちそうが準備してあつた。
とつても豪華だな…

鏡は正直であつた。 M e m o r i e s 3

大広間にはたくさんの方が集まっていた。

私たちに目線が集まる。

「皆様、静粛に！」

お父様の声が響く。

「さあ、お披露目いたしましょう！」

そう私たちに告げて、

お母様が一步前に入る。

「わがスカートレット家に新たな家族が増えました！」

フランお姉さまがこう言う。

「リリエラ、喋ってみて！」

そうだった、忘れていた。

呪いは解かれたはずだから喋れる、はずだ。

フランお姉さまに、頷く。

一度も喋ったことはないのに、
何故か、喋り方を知っている。
そんな気がする。

もし呪いが解けてなかったら……？
と考えたが、その考えを捨て、
声を出してみる。

「あ……、ふらん、お姉さま？」

ぱつとお姉さまの顔が明るくなる。

「レミリアお姉さま、リリエラが喋ったわ！」

ルリアも同じようなことをしていたようだ。

「フラン、ルリアが動いたわよ！」

二人は手を合わせて喜ぶ。

「レミリア、フラン、皆さんに挨拶を。」

「はーいー！」

「リリエラ、喋れるかしら？」

「うん。お母様」

「ルリア、立てるか？」

「うん！お父様！」

レミリアお姉さまが私とルリアを交互に見て、微笑みかけて前を向いた。

フランお姉さまもレミリアお姉さまの真似をして前を向く。

「さあ、二人とも。挨拶をして頂戴。」

「スカーレット家の長女、レミリア・スカーレットです。」

「スカーレット家の次女、フランドール・スカーレットです。」

「次はリリエラの番よ。」

立ち上がり、前に一歩歩く。

いろんな人が一気に私に注目する。

物凄く緊張しますよ…

「こちらが…新たな家族。」

何か月も前に教えてもらったお辞儀をする。

「スカーレット家の…三女。リリエラ・スカーレット、です。」

あたりに拍手が響く。

「そしてもう一人。」

拍手が急にやんだ。そして、ルリアの方に視線が集まる。

「スカーレット家の、四女、ルリア・スカーレットです。」

ぎこちないお辞儀とともにそう伝える。

拍手が響き渡った。

「本日は、お集り頂き、ありがとうございます。」

「わずかですが、食事を用意いたしましたので、ごゆっくりしてってください」

メイドに案内された席に座る。

隣にはこつちを向くルリア。

「…リリエラ、お姉さま。」

何だろう、違う気がする。

同じ日に生まれ、同じ日に認められたんだ。

「ルリア、初めまして。私は、あなたのお姉さんではない。

見た目的にはそうかもしれないけど、私はお姉さまとは呼ばれたくないわ。

双子だもの。」

「ふた…?」でも…」

「いいの。だから、お姉さまはいらないでしょ?」

少し何か考えたようだったが、顔をあげてにこつとした。

「うん、リリエラ。今日はパーティ、楽しみましょう?」

「うん。」

「ちよつと!二人とも仲いいのはいいけど、

私と、レミリアお姉さまにもかまってよね?!」

「ちよつ、フラン、なんで私も?!」

「だってそうでしょ?」

「う〜。」

もちろん、せつかくのお姉さまだ。甘えないわけにはいかない。

「うん！フランお姉さま！」

「わー！リリエラ可愛い！あ、そうだ、これあげるね！」

そういつて渡されたのは、

ローズスタンドル色の生地、黒いリボンのついた、ナイトキャップ。

リボンには白の線が二本入っている。

「ルリアにはこれ！」

サマーシャワー色の生地、黒いリボン。

リボンには同じ白の線が二本。

「あ、ずるいわフラン！私が渡したかったのに！」

レミリアお姉さまがぷくつと頬を膨らませる。

「フランお姉さま、ありがとう！」

ルリアの純粹な笑顔、癒しだな…

「お姉さま、ルリア、私は先に部屋に戻るね。」

部屋に一人で戻る。出窓のカーテンを開けると。

広がる星空、緋色の月。雨は上がっていた。

パーティでお客様に頂いた「正直の手鏡」に自身を写してみると、

そこには…

満面の笑顔の、私が出た…。

なんてことない毎日。のはずだった。

パーティが終わると、お客様たちが帰っていった。

もうすぐ日の出だ。忌々しい太陽というものを見る前に、

寝てしまおう。

そうだ、ルリアをお姉さまの部屋から引つ張ってこよう。

お疲れなのに迷惑をかけるのは申し訳ない。

それと、お父様とお母様に挨拶してこなくちゃ。

先にルリアだ。

「お姉さま、ルリアを連れて帰りたいのだけでも…」

「え、もうそんな時間!? そっか、また明日ね!」

レミリアお姉さまとフランお姉さまが残念そうな顔をする。

「うん、レミリアお姉さま、フランお姉さま、おやすみなさい!」

「おやすみなさい!」

「リリエラ、ルリア、おやすみ!」

次はお父様とお母様のところ。

「リリエラ、お父様とお母様のところに行きましょう!」

「ええ、今行く途中よ!」

「今日は楽しかった! 初めて“声”でリリエラと喋れたもの!」

今まではずっとつまらなかつたけれど、これからが楽しみだ。

「私も楽しかったわ! ルリアと手がつなげたもの!」

顔を合わせて、ふふつと笑う。

ああ、こんな日がずっと続けばいいのに。

お父様の部屋のドアを開こうとすると…

中から話し声が聞こえてきた。

何の話だろう?

「やっぱり、あの二人の力は強すぎる。」

「でも、そこまでしないといけないかしら？」

「あの二人がレミリアを傷つけたら？ フランドールを暴走させてしまったら？」

もう一人はお母様のようなだ。

「リリエラ、どうしたのー？」

「お母様とお話ししているようだから、少し待ちましょ？」

「うん……」

お父様の言う二人は、きっと私とルリアのこと。

「100年後の今日、その期限がくる。」

100年後……？

「ええ。するしかないのかしら、ね。」

「しようがないだろう。これが吸血鬼の掟だ。」

…『双子はどちらかが死ぬ』

私たちには呪いの解き方がわからないからな。」

え……？ し……ぬ？

「リリエラ、もうそろそろいいでしょ？」

「え、うん、いいよ。入ろう、ノックしてね。」

コンコン

「どなたです？」

「リリエラです。」

「ルリアですー」

「お前たち、何しに来たんのだ？」

「おやすみなさいしにきたの。」

「今日は今までで一番幸せな日！」

ルリアはそういった。

でも…あんなこときいちゃったら…

…いや、私だけの秘密にしよう。

せつかくの幸せを、壊したくはない。

「お父様ー、おやすみなさい」

「お母様、おやすみなさい、」

「おやすみ、ふたりとも。」

ルリアにおやすみと言い、
部屋に戻る。

もうすぐ月が沈もうとしていた。

月は何もないかのように平然と、いつものようにすましていた。

だが…私はあれが、あの月が。

“偽物”のような気がしたのだった…

幸せはこうして始まった。 Memories 4

〜リリエラ視点〜

コンコン

「おはようございます、リリエラお嬢様。

ご飯が出来上がっておりますので、準備をしてきてくださいね。」
今日もメイドさんの声で起こされた。

いい加減、自分で起きれるようにならないとなあ…。

さあ、行動時間だ。

まずは着替えなければ。

「リリエラ〜！おっはよ〜！」

あ、フランお姉さまがきてしまった。

ささっと着替えて、髪の毛をとかす。

ナイトキャップをかぶってつと。

「おはようございます、フランお姉さま！」

「だから〜！ございますは要らないの！OK？敬語禁止！」

「は、うん。」

「よ〜っし！」

朝ご飯は何だろう。

フランお姉さまと手をつないで、廊下を走る。

「あのね、今日は、私とレミアアお姉さまとお勉強するから、

リリエラとルリアは二人で「私もお勉強したい！」

「え？本当？」

前は大図書館に行っても、座って二人を見るだけだったけれど、
ほんとは一緒にしたかったんだもん…。

「だめ、だった？」

「ううん！逆にうれしい！」

二人でニコニコしながら廊下を走っていく。

メイドたちもその様子を見てほほえんでいるのだった。

「ところで。お姉さま。ここどこかしら？」

「……わかんない（汗）」

自分の住む屋敷で迷うなんて…

ちよつと悲しいんだけど…

あ、そういえばポケットに地図入れっぱなしじゃん！

「お姉さま！たまたまですが、ポケットに地図入ってました！」

「おお！イエーイ！やるなわが妹よ！」

だが。

「リリエラ、この地図のどこにいるかわからないのですが…？」

焦りすぎてフランお姉さまが敬語になってる…

「お任せ下さい、『Ring』」

すると地図に赤の点が現れる。

赤の点は私に向いている方向を示しているらしい。

お父様のマジックアイテムは実用性・見た目・機能性共に、とても優れていて、まだ幼い私でもわかりやすいのだ。

「おお！すごいナニコレ！」

「これが今私たちがいる場所です。」

「つてことは、ダイニングはここだね！」

なんと、一つ階を間違えただけらしい。

目の前の階段降りるだけじゃんか!?

部屋に入ると、もうみんな揃っていた。

「遅れてすいませーん!!」

「もう！何してたのフラン！」

と、レミリアお姉さま。

「リリエラ…」

と、なぜかとっても素敵なくらいに殺意を感じるルリアの瞳。

「すいませんでしたあああつ!!」

なんかの漫才かつ!

「まあまあ二人とも、落ち着いて、ご飯食べましょう。」

フランとリリエラも立ってないで座ってね。」

お母様が女神に見える。 ヴァンパイア 悪魔なのにね。

「「「「いただきます!」」」」

今日はトマトスープとバターロール、それと何かの肉のサラダだった。

シンプルが一番です。はい。

ご飯を食べ終え、一度自室に戻る。

もうベットは整えてあり、朝脱ぎ捨てていった服もハンガーにかけてあった。

メイドさん、大変だな。

「リリエラ! 大図書館に行くよ! 早く早く!」

ルリアがわざわざ迎えに来た。

そうだった、ルリアは一度も行ったことがなかったんだっけ。それは楽しみだろう。

「今行くー！」

と言ってドアを開ける。

ルリアは私の手を取り、そのまま走るのだった。

あり？こんなことが今朝あったような気がするんだけど？

ま、地図あるからいいか。

と思っていた時期が私にもありました。

地図に『R i n g』を唱えているのだが。

あの赤い点が現れない。

地図の外側に来てしまったみたい（汗）

いや〜。どうしよう。

…ほんとにどうしようか。

「リリエラ、さっきから静かだけど、どうしたの？」

「・・・地図の外側に来ちゃったらしい」

「はああああああっ?!」

いや、これは明らかにルリアが悪いでしょうなあ

だって連れてきたのルリアだし？

階段何個か間違えてるし？

そもそもここ多分だけど、館の裏側だし？

「あー、どーしよつか、リリエラ？」

「んー、手当たり次第にドアを開けていく、とかは？」

「…無謀だね。」

あれ？そういえばここに窓ないよね？

なのにどうしてこんなに明るい？

ルリアも気づいていたのだろう。

「そういえばここ、明るいね、窓ないのに。」

なぜ明るい？つて、そうか、これが私たち吸血鬼ヴァンパイアの特性、か。

無敵じゃん、それ。

「また無言だあー。」

「ん、ごめんね、考え事してたんだ。」

「ふーん。で、私の記憶によると、この道まっすぐ戻って、右に曲がって、階段上って、
それで、60歩歩いて、その曲がり角で左に曲がる、後そこから右に89歩歩いた
ら

お母様の寝室だよ、OK?」

何この子、怖いくらいの記憶力なんだけど…?

「わかったの〜?」

「う、うん、案内宜しく。」

「は〜い! そんじやいっくよ〜! ルリアのガイド付きでお母様の寝室まで!

れっつご〜!」

さくさく進むルリアが怖い。

・・・五分後・・・

ルリア凄い。マジ天才。

「はい、到着! お疲れ様! お部屋に戻ろうか!」

ごめん、やっぱ取り消す。

ここまで頭悪いとは…

「ルリア、大図書館に行くんだよ。」

「あ、そうだったっけ、忘れてた。」

まだまだ図書館に着きそうじゃないなあ…。
ルリアは天然の子だね。うん。

これは記憶に過ぎないのか？
Memories 5

（リリエラ視点）

うん、お母様の寝室から行けばよかったんだね。

お母様の部屋からメイドさんにお願いで連れてって貰いました。

よく考えればお母様の近くにメイドさんがいるのは当たり前で、

しかも手が空いてる人が一人はいるわけだから、その人に頼めばよかったんだよ。

「なんか、時間かかったね」

ルリアさん、貴方が原因です。

なんて、言えるわけもなく。

大図書館によく到着です、物凄く時間かかりましたわ。

ぎいっ

不協和音を奏でながらドアを開ける。

「あ、リリエラとルリアだ！」

フランお姉さまが走ってきた。

「二人とも、こつちこつち！」

お姉さまについていくと、お父様とレミリアお姉さまがお勉強していた。

「お父様、二人が来たわよ！」

「ああ、レミリア、ここをやっておいてくれ。」

「ええ。お父様！」

お父様がこつちに歩いてくる。

私たちもお父様に近づく。

今更だけれども、お父様はとても大きい翼をお持ちだ。

漆黒の翼。

私のあこがれでもある。

「二人とも、迷子になつていたのだろうか？大丈夫か？」

「ええ、大丈夫！とつても楽しかったもの！」

楽しかったなら私もよかつたと思えます…。

なんてつたつて、ルリアの為だもんね！

「お父様、みんなでお勉強しましょうよ！」

「あ、フランお姉さま、お父様はそんなにたくさんいませんから。」

「そうだよ、フランお姉さま！」

妹二人の言葉はよく聞くんですよ。

「いや、私は大丈夫だ。さあ、フランはあの言葉を読めるようにしておいで。」
「んー、今行きまーす。」

フランお姉さまは机に向かって行って、少し高い椅子に座る。

お父様は、今度はこつちを向いた。

「二人にはこの文字を読めるようにしておいてもらおうか。」

そういつて、羊皮紙を渡された。

きれいな字が並んでいる。

「げ、ナニコレ。」

「ルリア、読めるようにするんだよ?」

「ええええええつ!」

驚き方…。

これを読めないと本は読めないということだろう。

さて、私もこれを読みますか…

つて、んん〜?

普通にわかるよ!?

なんでこれを読めなんて言っただらろう?

「あの、お父様。」

今度はレミリアお姉さまのところに行っていたお父様を呼び止める。

「なんだ、リリエラ？」

「あの、これ、全部普通に読めます。」

「……え？」

ルリアがこつちを向いて、

なにか恐ろしいものを見たかのようにかたまってしまった。

「リリエラ、読んでみなさい。」

お父様が震えながらこう言った。

内容はこうだった。

『差し込む窓の外に浮かぶ真円の紅い月。

映り込む格子の影は窓辺に座る私を十字に割く。

触れるだけで崩れゆく儂い時間^命でも。

確かなものであれ、進み続けるのだ。』

シーンとした大図書館。

え、何か間違っていた？

レミリアお姉さまが走ってきた。

「リリエラ、それ、私が読むのに三カ月かかったやつよ!？」

お父様が真っ青だ。

「リリエラが五分もしないうちに読めてしまうとは…」

フランお姉さまに後ろから捕まえられた。

「リリエラ、私の本と一緒に読みましょう、まったくわからないのよ…」

本の整理をしていたのだろうメイドさんたちも走ってきた。

「リリエラお嬢様があの鍵を握るものなのですね…」

鍵って何だろう? まあいいか。

「お父様、私にもフランお姉さまのような本をください。」

「あ、ああ、いいだろう、メイドよ、例の本を。」

メイドさんが目をキラキラさせて走っていったと思えば、

何やら大きなものを抱えてきた。

「はい、こちらでございます。」

なになにく?

『魔法入門 I』

え、魔法!?魔法できるの!?

「リリエラ、やる気はあるか?」

答えは一択だろう。

「もちろん、やらせていただきます!」

「リリエラ…凄すぎっしょ…」

あ、ルリアのを先に手伝わなきや。

フランお姉さまが目をキラキラさせる。

「これでリリエラも魔法少女だね!」

そうか、魔法少女か。

なんか、これからが楽しみ!

と、思っていた時期がありました。
もう二年はやってるんだけどなあ

魔法ってあのキラキラってしてるやつだと思つたら大間違い！

無駄に長い文章を読んだりとか、

魔法陣描いて、そこに滅茶苦茶なくらい細かい字書いたり：

私には根気が足りなかった。

大図書館から帰る途中。

「ふい〜つかれたあ〜」

そんなことを言っていると、ルリアが血相を変えて走ってきた。

「リリエラ！大変、人間がたくさん来たわ！お母様が、部屋で待っていないさい、だつて！」

え？館の中に人間？

そんなはずがないでしょ？！

人間が来たとしても門の前で止まるはず！

だつて、門のところにはあんなにたくさん術式がかかっているのだから！

「魔術師がいるらしいの！お姉さまたちのところに行きましょう！」

あ、そうゆーことね。

いや、やばいじゃん。

お父様の高度な魔術を解除できるってことは、お父様と同等かそれ以上！

「ちよ、やばい、早く部屋に行こう。」

「だからさつきからそう言ってるでしょ！」

コンコン

「はーい！あ、リリエラとルリ、ふぐつ！」

「レミリアお姉さま、人間よ、お母様が隠れていなさいだつて！」

「あく私が言おうと思つてたのに〜！」

ルリア、それどころじゃないんだから黙つててほしい。

「え?!人間?!隠れましょう！」

「だから素晴らしいに來たんだつてばあ…」

我が家では人間が攻めてきたとき、狙われやすいのが一番幼い者だから、私たち子どもは隠れていないといけない。

「そーいえばフランは?フランはどこにいるの!?!」

フランお姉さまは部屋にはいない、大図書館にもいなかった、

ルリアがお母様の部屋にいたときにもフランお姉さまはいなかった、

なぜなら、お母様がルリア一人で返すはずがないから!

なら、答えは一つだ。

「フラン（お姉さま）はお父様の部屋（ね）！」

なんと、レミリアお姉さまも同じことを考えていたらしい。

「え？…え？…どゆこと？」

「今説明してる時間はないわ！二人はここで待っていなさい！」
そういつてレミリアお姉さまは走り出す。

出窓部分に座り、外を見てみる。

門の方から火が見える。

人間が持つているものだろう。

やはり、館の中に入ってきているのだ。

まて、何かおかしい。

なぜこんな夜中に、私たちの有利な時間に人間がくるんだ？

しかも今日は月がでてる…は、ず？

「月が、ない？…そんな、まさか！」

そう、今日は新月。夜でも一番力が弱まる日。

「リリエラ、落ち着いて、深呼吸。顔が怖いよ？」

「う、うん、ありがと」

吸ってはいてを数回繰り返す。

もう一度考え直そ…

ゾワア

「お姉さまが危ないっ！」

一瞬間を見合わせ、ドアをあげ放つ。

するとそこには数分前にはなかった

ひどい光景が広がっていた。

「う、そ？でしよ？」

ルリアが固まる。その横顔に一筋の涙が伝う。

廊下にはたくさんの人が倒れている。

ナイフで刺された者、何かで殴られた者。

いたるところに血がついている。

私たちについていたメイドさんや執事さんたちだった。

「ルリア、行くよ。」

お父様のお部屋へ向かう。

あと少しのところまで、お父様の部屋から悲鳴が響いた。

「キヤーーーーーッ!」

ドアは開け放たれていた。

走って部屋に入る。

：状況はこうだった。

お父様がヴァンパイアハンターと言われるものに

殺されそうになっていたところを

お母様が盾になることで防いだのだ。

自らの命と引き換えに。

お父様はもう手遅れとも言える状態だった。

銀に光るナイフが体のいたるところに刺さっている。

今のうちに、回復術式を組み込む。それが私のできることだ。

フランお姉さまは怪我をしている。

レミアアお姉さまはその怪我の治療をしたようだ。

叫んだのはフランお姉さまだった。

家族の中で、一番お母様と一緒にいた。

そして今も。

お母様のそばにいたのだろう。

フランお姉さまから物凄い量の殺気が放たれる。
レミリアお姉さまからもだ。

「私の…私たちの…大事な…大事な…お母様を…」

よくも…よくも…」

「よくも、なんだ？」

ヴァンパイアハンターが聞き返す。

あーあ、お姉さま怒っちゃった。

こうなったら気が済むまで壊しつくすまで怒りが収まらないから…

だが、次の言葉は、予想外の場所から発せられた。

「よくも殺してくれたわねえ？」

後ろからだった。ルリアが、見たこともないオーラをまとっていた。

まるで別人のように。

その姿はまるで天使でありながらも、悪魔の眼をしている。

彼女の隠されていた翼が現れた。

全てを飲み込むような漆黒。

全てを断ち切れそうな鋭利さ。

漆黒でありながらも透かしてみえる向こう側。

まるでガラスのようだ。

でも…触れてはいけないと、本能がそう語る。

「そうねえ、貴方は死になさい？」

ルリアの足元から冷気が放たれる。

そして、ヴァンパイアハンターへと

ルリアが一瞬で作成した氷塊アイスハルバーの槍が放たれた。

その瞬間、ヴァンパイアハンターは最期だと察したのか。

「いっけーいっけーッ！」

大量の銀のナイフをお父様に投げつけた。

普通のヴァンパイアならもう死んでいるであろう量のナイフが刺さっていた

お父様に、よけられるはずがない。

ヴァンパイアハンターに氷の槍が刺さり、息絶えると同時に、

お父様にナイフが刺さった。

お父様が、最後の力を振り絞ってこう言った。
「わが娘たちよ、この館はお主に託そう。

レミリア、お前が当主だ。すべて守り抜け。
いつでも未来を見るのだ。

フランドール、母の…ネックレスはお前に。

お前が困ったときに支えになるだろう。

リリエラ、この指輪はお前に。

その鍵で切り開くのだ、自らの道を。

ルリア、お前には母のイヤリングを。

お前を守ってくれるだろう。」

「「お父様、ありがとうございます。」」

お父様は微笑み、息絶えた。

シーンとした部屋に笑い声が響く。

「うふふふふ……あはハハハハハハハ！」

フランお姉さまが手を開き、そして、手を握る。
ヴァンパイアハンターが跡形もなく消えた。

そして、もう一度。

お父様も消えた。

最後に一度。

お母様も消えた。

残ったのは、お父様の指輪と、お母様のネックレスとイヤリング。
それと、血に塗れた子供が四人。

…この晩、館の名は新しくなった。

紅い血に塗れた悪魔ヴァンパイアの館、

『紅魔館』と。

忘れるものはあなたです
Memories 6

（リリエラ視点）

「…お姉、さま？」

「あは、ははは、は…は？」

「フラン…。」

「あ…：お母様、は？お父様もドコにいるの？」

「フラン、あなたが『壊した』の。」

「え、あ、あああああつ！」

お姉さまは狂ったように周りの死体を壊し始めた。

「フラン！やめなさい！」

「いいえ！やめないわ！こいつらが悪いのよ！こいつらが来なければお父様もお母様も生きていたわ！」

人間やメイドたち、見える範囲で生きていないモノを壊した。

「アハハハハ！消えろきえろキエロツ！」

「フランお姉さま！」

「ん？なに？すべて壊せば問題ないでしょう!?あははははっ！」

しょうがない、アレを使うしかないのか。

「レミリアお姉さま、離れてもらえますか？」

「え、あなたまさかアレを？」

「しょうがないわ、そうするしかフランお姉さまは止められないの。」

「そう、リリエラがそう決めたなら。」

「ありがとうございます。ルリアをよろしく。」

「ええ、がんばりなさい。」

お姉さまが部屋の隅に移動する。

そして、私は、『形・物事を操る程度の能力』を。
呼び起こしてみろ。

「さあ、今こそ必要な時だ。

目覚めよ！お前の力よ！」

ああ、お父様の声が聞こえる気がする。

目を開くと、セカイが変わる。

足元から赤銀の風が巻き起こった。

たくさんのタブが見える。

カーペットや壁、床、レミリアお姉さまの、ルリアの。

ん？どこだろう？ないなあ。

どこだ？あ、あった。

「みつけたっ♪」

お姉さまのタブを開く。

そして項目8、能力を開く。

選択肢は…

「一時的に能力使用禁止。」

これで、終わった、はず。

「あはははは！あ、あれ？「目」が見えないよ？あれ？無い！」

レミリアお姉さまが来た。フランを抱きしめる。

「フラン、無理はダメなのよ？」

「無理なんて…してない、よ？あれ？目から水がでてる、ナニコレ？」

あー無理してたんだ。

「涙、ね。お姉さま、無理してたんでしょ？」

「ううん、違う、あれ、そうかもしれない、どっちだろう？」

すると、さつきヴァンパイアハンターに氷塊の槍を投げたルリアが起きた。

「あれ？みんなどうしたの？お父様とお母様は？ねえ、どうしたの？」

「私が『壊した』わ。」

フランお姉さま、落ち着いてくれたようでよかったあ。

あ、回復術式、そのままだった。

消費魔力ひどいからルリアに使おうかな。

「なんでフランお姉さまが？」

「狂っちゃったのかもね、今はもうわかんないや。」

「フランの言う通りよ、ルリア。昔は忘れなさい。」

「そうだね、じゃないと笑えないもんね！うんうん！」

∴正直、ルリアは純粹すぎると思う。

被害内容

館の半壊（フランドール）

お父様&お母様の死亡（人間&ヴァンパイアハンター）

書類一部破損（ルリア）

レミリアお姉さま手作りの被害表。

これを見るとわかる通り、フランお姉さまとルリアしか被害を出していないわけだ。人間は別として。

「さあ、今から館に残っている人間を捕まえに行きましょう！」

「「ええ！お姉さま！楽しいパーティーね！」」

「それじゃあ、二人で行動！フランとリリエラ、ルリアと私ね！」

「「OK！」」

「館東側がフランとリリエラ。西側がルリアと私。さあ、行くわよっ！」

待っていたといわんばかりにカリスマが發揮されている気がする。

「リリエラ、いくよ？ Are you ready？」

「OK！レッツゴーだよ！」

東側へ走る。

「あのさ、今更だけど、さつき館中の人間、壊しちゃったんだよね…」

「あ、やつぱり？サーチしてたけどそれっぽい生命反応ないなーって思ってたんだよねー」

「あはは、やつぱりリエラは気が合うなあ！」

「うん、私もそう思う！」

「でもね、もう誰も傷つけたくないから、地下に籠ろうと思う。」

魔法の研究とかもやってみたいし。」

「ええええっ!?!」

「というか……さつきからお姉さまの蝙蝠がうるさいんだもん。」

魔法の壁張って、一人になりたいだけだよ？」

「うん、それはわかる。」

やつぱり、お姉さまといると楽しいな。

「お嬢様!ご無事でしたか!?!」

あれえ？メイドさんだあ！

「お姉さま、もしかして…」

「うん、館に住まない人間だけだよ？壊したの。」

すげえ…お姉さま強い…

「私たち、今日は非番だったんです！」

「レミリアお姉さまに知らせなきゃ！えいっ！」

私は紙とペンを出現させると、紙にメッセージを書く。

そしてあとは、風素出現させて、バーストするだけ。

なんて簡単なんでしょう！

「バースト。」

紙は風に乗って飛んで行った。よし、OK！

「リリエラすごいんだけど。何この妹」

フランお姉さまが固まってる！

これ、簡単なんだけど…

「あ、よかつたら今度教えようか!？」

「えっ、いいのっ!?! やった!」

お姉さまも喜んでくれた。

さ、そろそろ戻ろう!

「…というわけで、生きてたメイドと執事、それとリリエラが館修理、

フランは家じゅうの血とか肉を回収して、ルリアはできる限り汚れを拭きとって頂戴。

あ、私は総司令官だから。お父様とお母様の物を片付けとくわ!

異議はないわよね?」

「「「異議あり! (でございませう)」「」」」

フラン、ルリア、メイド、執事、私が異議を唱える。

「異議は聞かないわ! この館の為だもの、急ぎなさい!」

お姉さまが鬼だあ…

あ、館? 魔法で完全修復しました。

修復術、使えるじゃん。

数週間後

「いっつや〜よく寝た!」

いや、そんなに寝てないけど。気分的にね。

あの事件からもう三週間以上が過ぎた。

変わったことはいくつかある。

一つ目、館の当主が変わった。お父様からレミアお姉さまに。

二つ目、フランお姉さまが引きこもり生活を始めた。地下の部屋で。

三つ目、ルリアがお花を育て始めた。今はしよっちゅう大図書館に来て、たくさんお花関係の本を読み漁っている。

四つ目、私は素手や剣、弓、槍などを使った武術を練習し始めた。

五つ目、私が大図書館の整理をして、誰でも見やすいように本のジャンル分けをした。六つ目、フランお姉さまは魔術を勉強し始めた。

七つ目、ルリアが髪をツインテールに結び始めた。

八つ目、レミリアお姉さまの能力が開花した（らしい）。

と、こんなところだ。

今日もいつも通りだなくと思っていたら。

そうならなかった。

めっちゃデジャブ。

「やばいやばいやばーいっ！」

ルリアがそう言っつて、大広間に駆け込んできた。

「ちよつと、ルリア、お行儀が悪いわよ、走らないの！」

レミリアお姉さまがここぞとばかりにカリスマ発揮。

私はたまたま地下から出てきていたフランお姉さまと顔を合わせてくすくす笑う。

「ちよつ、フランとリリイ、何笑ってるのよ！なんか言いなさいよ！」

忘れてた、私の呼び方が、リリエラからリリイになったんだ。

ルリアはルリイになった。

「それよりルリイ、何事なの〜？」

「ぐつ、館の主である私を無視するなんて！う〜！」

「はいはい、レミリアお姉さま、ちよつと静かにしててね。」

「うああああっ！扱いがひどいわよ！」

「……みんな面白いといひ何なんですか？」

「「すいませんでしたあああつ」」

断言しよう、ルリアは怒らせちゃだめだ。

「うん、それなら黙って聞いてね。

やばいの、門の外に紅い髪でチャイナ服着てる人がいる。

なんか妖怪っぽい！」

妖怪って…東洋の国の言い方じゃん。

「メイドは室内待機、あと全員で行くわよ、わが妹たち、いいかしら？」

また変なところでカリスマ発揮してるし……

「いいよ〜」

「魔法使える?!よし、いくわー！」

フランお姉さまが乗り気だ。

「気になるから行く〜」

「それじゃあ、メイドは伝達宜しく！」

大広間のドアをメイドが開ける。

扇形のように、レミリアお姉さまを中心に歩き出す。

門に到着する。

「お姉さま方、私が魔法防御壁張りますので少々お待ちを。」

「ん〜」

術式組み立てしてつと。

うん、完璧！

「はい。」

「はやっ！」

「これくらい普通よ、フランお姉さまも練習してればできるようになるわ！」

「あのさ、リリイ、なんで私にははってこれないの!？」

単純だ。これしか理由がない。

「だって、見てるだけだもの。」

あ、フランお姉さまとハモツた。

「それじゃあ行くよー！」

門を開けると、一人の女性が立っていた。
なんか、ものすごく、背が高い。

「「おう、たか〜い」」

「みんな何おかしなこと言ってるの？高くないじゃん？」

「「空中浮遊しながら言うな！」」

ルリアはいつまでたっても天然だわ。

「あの、ちよつといいですか？」

「あ、ちよつと待っててくださいね〜この二人何とかするんで。」

「あつ、はい〜」

——五分後——

「はい。」

「あ〜。そろそろいいですか〜？」

「はい。ご用件は？」

「あの、今日、力試しに来たんですけど…」

「なんだ、それだけか。」

「うん。」

「この館の姉妹がものすごく強いって聞いてきたんです」

「うんうん、お姉さまもルリアもものすごく強いよね！」

「で。」

「戦っていただけます？」

「『いいよ。』」

「戦闘かあ、久しぶりだし、楽しみだあ！」

「じゃあ、魔力抜きで強い人誰ですか？破壊系能力以外の方がいいんですけど。」

「じゃあ、私は無しだねー」

「フランお姉さまは『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』だからしょうがないね。」

「じゃあ、レミリアお姉さまか、リリエラか、ルリアだね。」

「わ、私はいいわ。主として見守るべきだもの。」

怖いのか、そうか。

「リリイ、どうするの?」

「私はお花育てる方が性にあってるかなあ〜」

そうか。それなら…あれ?

「私いいいいっ!」

「うん。」

「それじゃあ、よろしくお願いします。」

「あ、お願いします。」

そして…幕開けだ。

相手を侮つてはいけないことは知っている。

先に二重の防御壁を張っておいて正解だったかもしれない。

「はっ！」

鋭い蹴りが伸びる。

ヴァンパイアの力で跳躍し、紙一重でよける。

伸びてくるこぶしの追撃を食らわぬように、

右によける。そして上。

「…能力開放。」

普段はつかっていない能力を開放すると、

足元から赤銀色の旋風が巻き上がる。

そう、これ。この感じ。

「待ってましたよっ！」

「やあああっ！」

自らの魔力を取り出し、結晶化する。

彼女の拳や蹴りをよけながら。

そして。

「バースト！」

開放し、赤銀のそれを自分の拳に纏わせる。

「はあああああつ！」

彼女の拳をギリギリでよけ、そして、そのお腹をねらつてなぐつた。
バタン

「あ、手加減するの忘れてた！」

「「はあ。」」

気を失ってしまったので、救護室に運びました。

——一時間後——

「いてててて…あ、私生きてた。」

「いい試合だったわ、お疲れさま。」

「え?! あ、ありがとうございます?!」

「その…大丈夫?」

「いやあ、すいません、たぶん大丈夫です。やっぱりヴァンパイアは強いですねえ…」

お姉さまにメッセージ魔法飛ばしてつと。

「あの、本気で殴っちゃいましたけど。」

「ありがとうございます。」

この人、マゾなのか…?

「それにしても、強いんですね、今までで一番!」

あ、お姉さまが部屋に入ってきた。

「そうよ、大切な私たちの妹だわ。」

レミリアお姉さまがそう言う。

「あなた、この館で働かない?」

レミリアお姉さま、滅茶苦茶。

「ええっ!？」

「そういえば、名前なんて言うの？」

「あ、ホンメイリン紅美鈴です。」

「じゃあ、美鈴、よろしくね。」

「え、えええええっ?!」

フランお姉さまも滅茶苦茶だった。

「まあ、負けましたし。この紅美鈴、死ぬまでお仕えしましょう。」

この人も滅茶苦茶だったよ。

悲しい出来事、いつかは忘れるんだ。

そんな日を目指して。一日一日を大切にしたいな。

いつかは過ぎる、分かっている。 Memories 7

くりりエラ視点く

誰だって知っていることだろう。

幸せがあれば悲しみがあること。

苦しみの分、喜びがあること。

：始まりには必ず終わりがあること。

私は吸血鬼としてこの世に生を受けてから、

たくさんの物を得た。

そして、たくさんの物を失った。

でも、ここまで進めたのは、大好きなレミアお姉さま、フランお姉さま、

ルリア、それに、死んでしまったお父様とお母様、

いろんなことを教えてくれた執事やメイドさん、

他にもいろんな人のおかげだと思う。

え？今どこにいるんだって？

それは一週間前にさかのぼります。

——一週間前から今に至るまで——

今日もいつも通り、大図書館にやってきました。

美鈴ももうすっかり館になじみ、メイド兼私の武術の先生。

美鈴は、妖怪の一種らしいから、長生きするらしい。

私も、生まれてからもう150年がたっていることに気が付いた。

ちようどさつき。

まあ、三十年目からは、

起きる↓みんなで朝食↓大図書館で本漁り↓昼食↓美鈴の稽古

↓ティータイム↓フラン_地お姉さま_下の部屋で魔法の研究

↓晩ご飯↓お風呂&読書しながらストレッチ↓寝る

をただひたすら繰り返してたからね、怖いわ。

今夜は何かがありそうな予感をさせる紅い月。

まあ、私はいつも通り、本を読んでいます。

あれ？この本、スカーレット家の本だ。

なになに？『双子の呪いについて』？

えっと、

『双子は片方、又は双方が死ぬか、この呪いを解くしかない。

死ぬまでの余命は、見た目が5歳を超えたときである。

解くには、館から百年以上離れること、その間、家族の記憶を消すこと、

自分の翼は魔法か何かで物理的に封印すること。』

か。うん。

え……？これ滅茶苦茶大切じゃん。

「うわああああああっ！」

ルリアが来ました。

いつも通り……じゃないね。

「ルリイ、どうしたの？」

「どうしたもこうしたもないわ！門の前に人がいる！」

「……お姉さまにメッセージ送ったわ。」

「だから早すぎだよ！さ、大広間に行こう。」

二人で全速力で館内を飛ぶ。

メイドたちが驚いている。ごめんね。

よし、ついた。

最近は大図書館から大広間まで三分あれば余裕で行ける。

「お姉さまー！」

「話は聞いた（わよ）！」

「さあ、行きましょう！」

今日はフランお姉さま、出てきてたみたい。

やった、これでまたお話しできるね！

お姉さまを追うように廊下を飛んでいく。

ああ、飛ぶのは楽しい。

途中で美鈴にメッセージを飛ばしておく。

じゃないと心配するからね、危ない危ない。

「とうちやーくー！」

「わーお、魔力やばいぞこれ、魔法使いだ！」

「やったー！」

「ねえ、門開けるよ〜」

「いいよ〜」

これ、いくらなんでも軽すぎ。ノリってこわいわ。

ギギギギギギ…

「あの、こちらが紅魔館であつてますよね？」

「ええ、ご用は何でしょう？」

「私、パチュリー・ノーレッジというものです。」

「こちらにたくさんの本や魔導書があると聞いて駆け付けた次第でして…」

「の、ノーレッジって、あの魔法使い一家じゃん！リリイ！」

「あ、あなたがリリエラさんですか？本、貸してください！」

「お姉さま、いいでしょうか？私、アレ全部読みましたし。」

まあ、開けない本とか、呪いがかかっている本以外だけど。

「はああああっ?!アレを全部とかどうかしてるわ！」

「あははは…」

「いいわ、許可しましょう。」

それと、パチュリーさん、あなた、ここの館に住む気はない？」

「はあ？」

また無茶苦茶なお姉さまが…

「え?! いいの!?! やった!」

パチユリーさんも滅茶苦茶だったよ…。

「割り振りは何枠? メイド? 魔法使い?」

それなら、大図書館の司書がいいと思う。

「お姉さま、大図書館の司書はどうかしら?」

私はこの館の魔法使い兼主の妹だからね、いいと思うんだ。」

「ああ、その手が! じゃなくて、それを考えていたのよ!」

パチユリー、あなたを我が館の大図書館の司書として迎えましょう!」

今、絶対考えてなかった。流石かりちゅまお姉さま。

「ありがとう! それじゃあ、また明日の朝、ここに来ます。」

荷物をまとめてくるわ!

あ、この館で魔法使える人はいるかしら?」

「私と、フランお姉さま。二人で研究とかしてるの。」

「あと、レミリアお姉さまは魔力あるけど、使えないよね、リリー!」

「そうね〜フランお姉さま!」

「ちよつと二人!やめなさい〜っ!」

「え〜…:はい。」

お姉さまににらまれると背筋が凍る。

「とにかく、また明日、待つてますので、勝手に入ってきてください。

あ、これ館内地図です。私は大図書館にいますので。」

「ありがとう、リリエラさん。私のことはパチュリーでいいわよ?」

「あ、はい、パチュリー。おやすみなさい。」

「待つてますよ!」

「ね、もうすぐ太陽上るよ?」

パチュリーの後姿が見えなくなると同時に、

みんなベットに向かった。

…こんなところで死ぬわけにはいかない。

——2日目——

目が覚めると、もう月が完全に上っていた。

「やっばー！」

ベツトから飛び降り、クローゼツトからブラウスとトツプス、スカートを取り出す。パジャマを脱ぎ、ブラウス、スカート、トツプスの順に着る。

パジャマはベツトに広げて置いておく。

メイドさんが片付けやすいし、私も楽だから。

そんなことはどうでもいい！靴下どこだ！

あ、あつたあつた。はいて、靴、うん、オツケー？じゃない！

ナイトキャップ忘れた！

あ、魔導書も！

…朝食に遅れてお姉さまとルリアに怒られました。

食べ物の恨みは恐ろしいんですよ。

てなわけで、朝夜から忙しかったです。

大図書館に歩いて行って、ひとつ気付いた。

「昨日散らかしっぱなしだったじゃん！」

今から片づけを…終りました。

スカーレット家に関する情報の棚にしまっただけでした。

次！

「フランお姉さまにメッセージ！」

『おはようございます、大図書館にいますのでぜひ来てください！』

そして魔法で手伝ってください。』

よし、オツケー！

というのを三秒で終わらせて、メイドさんに箒とはたき、雑巾をもらう。

数分すると、お姉さまが来た。

「おーい、リリィー来たよ〜？」

「お姉さま、お掃除手伝って！魔法のやつで！」

「お？魔法？やるやる！」

と言つて呪文を詠唱する。

すると、床が一気に新品のようになった。

「おお！こんなにきれいになるとは！」

あれれ？箒とか必要なかったね？

いろんなものを綺麗にし終わって、ソファアに座つて紅茶を飲んでいたらルリアがやつてきた。

「やつほー！わー、きれいになったねえ、新品だあ！」

素晴らしいながらいつものお花の図鑑を開いて見始めた。

「あ。このお花可愛い！今度はこっちにしようかな！

あ、リリイとフランお姉さま、私明日ね、めーりんにお花の育て方教えてあげるんだよ！

だから、私も勉強するから、邪魔しないでね!?

あ、紅茶はもうね〜

なんかひどい。

コンコン

「あ、どうぞー！」

「お邪魔しま…うわあっ！めちやくちやすごい！キヤー！」

バタン

あ、倒れた。

「ねえ、お姉さま。」

「うん、逃げよう。」

いやそうじゃなくて！

「一番近くの部屋に運びましょ。」

確かメイドさんの部屋があった。

「あ、うん。」

「あ、二人ともちよつと待って！メイドさんの部屋は本棚ないよ！」

「あ……」

と言っていると、レミリアお姉さまがやってきた。

「あ、お姉さままだ。何で来たの？」

「なにそれ!?!ひどくない!?!私呼ばれたんだけど!」

「あ、そう」

「うゝ！許さないわ！」

「あ、そう」

これは…長引くかな。

ほつというて風素を生成。

パチュリーの下に設置して…

「バースト。」

浮いたのを魔力の糸を使って、引っ張ってみる。

「あのさ、リリイ、リリイの部屋の隣に、確か空き部屋あったよね？」

あ、そうだ。

「ありがと、リリイ。それじゃあお姉さまたち止めといてね。」

「うん、またね」

私は自分の隣の部屋に入り、きれいに整えられたベットにパチユリーを寝かせる。暇だし本棚の掃除でもするか。

ん？なんだこれ。

本棚をどかすと、床に魔法陣があつた。

掃除して、もう一度見てみると、魔法陣は部屋の中心を向いていた
もしかしてと思い、反対側のクローゼットを開けると…

BINGO！また魔法陣だ。

部屋を見渡すと…天井にも。入口の真上だ。

それともう一つ。窓のふちにあつた。

確か、魔法陣を魔力でリンクさせると…

なんと。

カーペットの下に隠し扉が現れた。

明日開けてみようかな。

—— 3日目 ——

今日は昨日見つけたところに行こうかと思つたけれど、

双子の呪いを解くための儀式に必要な術式組み立てた。
いるのは…

- ・ 記憶消去魔法↓双子に関する情報を消す
- ・ 記憶捏造魔法↓双子ではなくほかの者にすり替える
- ・ 時間変更魔法↓双子の時間及びその他の物の時間を変える
- ・ 吸血鬼の弱点消去魔法↓人間と共存するため
- ・ 力を封じる封印魔法↓人間と同じになる。だが、もともとの能力は消えないらしいので、さくつと作りました。

(リリエラの日記より)

——4日目——

フランお姉さまを呼んで、隠し扉を開けてみた。

「お？階段じゃん！」

お姉さまに引つ張られながら階段を降りるとそこには部屋があった。
祭壇と、いくつも並んだ石。

祭壇には私が読むことのできない字が書かれている。

この文字…どこかで…？

あ、この前のスカーレット家の本だ。

最後のページにこれと同じ文字が書いてあった。

私は何らかの理由で大体どんな文字でも読める。

しかもどんな言語でも聞き取れるし喋れる。

…正直チートレベル。

まあ、祭壇がものすごく不気味です。

「何この窪み？指が入りそう！えいつ！」

お姉さまが壁に見つけた窪みに指を突っ込むと…

ぎゃーぎゃー

隠し扉が現れた。

「おお！凄いい！」

「うわ、お姉さま、ここ暗い！」

「うん、行く！」

いや〜やっぱりフランお姉さまは行動力ありすぎて怖い。

階段をしばらく降りると不思議なドアがあった。

ぎゃーぎゃー

「はいろ〜」

…誰かいる。

『やあ、はじめまして！呪いの番人の部屋へようこそ！』

「うん、帰ろうか。」

『え、ちよつと待って！ひどくない!?』

「あ、うん。」

『僕は呪いの番人！この部屋に来た人は君たちが生まれて初めてだよ！』

ま、死んでるけどね！あはは！何か聞きたいことある?』

「ねえ、呪いの番人のくせに、やけに態度軽いんだけど…」

『あ、双子の子の片割れだね。それじゃあ君にはこれを。』

そういつて不思議な形の鍵を渡された。

「あ…『鍵を握る者』だ…」

あ、そんなこと言ってたな、お父様。

『双子の儀式まではアト…3日。』

なんか変な感覚…まるで魔法がかかったような…

「リリイ、双子の儀式って?」

「…夕食の後に説明いたします…」

「ん、わかった。」

あ、この番人が魔法詠唱してた。

オーラ見た感じ、転移系だね。

『さあ、大広間へ…また会おう。』

瞬きすると、そこはいつもの大広間だった。

「リリイ。」

「うん。分かってる」

「…というわけなのです。はい。」

「いきなりすぎてよくわからないわ…」

「リリイ、なんで黙ってたの!？」

いや、聞かれなかったし。

「リリエラお嬢様…気づけなくてすいません…」

美鈴はそんなに重く考えなくても…

「美鈴、どうせいつか戻ってくるんだよ？大丈夫だって。」

フランお姉さまはやっぱり気楽すぎる。

「うわー！ やっぱりスカーレット家は面白いわ！」

パチュリーはにこにこしながらそう言った。

「ところで、みんな。もうすぐ太陽上るよ？」

ルリアの言葉で、ハツとした。

「「「やばい——っ！」」」

自分の部屋に走り出す5人だった：

——5日目——

今日は、お姉さまたちとお庭でランチを食べた。

いつも通り、でもそれが一番だと思った。

(リリエラの日記より)

——6日目——

しばらくできないと思われる魔法を研究した。

フランお姉さまやパチュリーと。

パチュリーは私たちの知らないことを知っていた。

出来ればもう少し早く会いたかったなあ…

(リリエラの日記より)

——そして、今。——

思えば、今週が今までで一番濃密だったなあ。

あの儀式部屋に、みんなが集まっている。

『さあ、血をささげよ』

あの番人さんの言葉に従う。

祭壇にあるろうとのようなところに血を流し込む。

すると、祭壇に書かれたもじが赤色で壁に浮かび上がった。

『呪いを解くのは貴方。呪いを知るのは私』

そうか。この祭壇の字は、壁に浮かび上がらないと読めないのか。

じゃあ、あの本の最後のページのは、鏡に映せばよかったのか？

あゝあ。今更だなあ…

『汝らの呪い、いつか消える。そして再びここに戻るだろう。』

「リリイ…ルリイ…私は待つてるわ。」

あ、レミリアお姉さま泣いてる

「レミリアお姉さま、泣いた方が負けでしたよね？」

戻ってきたとき、プリン貫きますからね！

「そうだよ〜もらつちやうよ〜！」

「とか言いながらルリイも泣いてるし。」

「お嬢様あ…私は忘れるけど、忘れませんよお〜」

「美鈴、言ってることが矛盾してる。」

「まあ、また一緒に魔術の研究しましょうね？魔女の誓いよ？」

「ええ、パチュリー。それまで待つててね？死んだら許さないわ。」

『消えよ、無慈悲な呪い。そして、新たな生を与えるのだ…』

「またね、みんな。」

「「待ってる（ます）、二人とも。」」

まぶしい光が広がる。

そして、

そして。

…これが私がリリエラ・スカーレット彼女であつた頃の。

私の何百年も前の。

大切に、忘れることのない。

忘れることのできない、

幼き頃の、記憶である。

私たちの旅は、まだ、始まったばかりだ。

彼女たちの日常。

記憶Ⅱ大切なモノ

く瑠璃々視点く

「璃々！帰ろ〜！」

私はあかつき 璃々りり。

今迎えに来たのは隣のクラスの双子の妹、あかつき 瑠璃るり。

「うん、今行くつ、と。」

私は今日の学級日誌をさつと書き終え、先生に渡す。

「それじゃあ、暁さん、帰っていいですよ、さようなら」

「瑠璃、できたよ、行く。」

私は机の横にかけてある、もふもふの白うさぎのマスコットがついた鞆を取る。

「お待たせしました。じゃ、今日はどこ行く？」

毎週金曜日はどこかに出かける。それが二人の約束だった。先週はカラオケ、先々週はゲーセン。その前の週は本屋さん。今日はどこに行きたいのかな…？

「帰りながら決めようよ、そっちの方が楽しいじゃん。」

「うん。靴はいてくるね。」

下駄箱で靴を履いて、マフラーをつけた。

そのまま外に出て、エントランスでぼけーつと数分突っ立っている。

また璃々がほかの友達につかまってるな

「遅いよ、またつかまってるの?」

「ごめんごめん、よっしゃ!今から走るか!」

校門を出ると、いきなりそういう瑠璃。

「走って大丈夫?おいてくかもよ?」

「だいじょーぶ!誰も璃々には追い付けないって!」

ま、学年一早い女子って言われるくらいだもんね…

「まあ、そうか。って、それ何？」

瑠璃の鞆には色違いのピンクのうさぎのキーホルダー。

その横に、三日月の形のパーツが付いたシユシユがあった。

「あ、これ？ふふふ。秘密！」

「あ、いいわ。その顔見ればわかる。」

「え…そんなに顔に出てるの？」

「いや、出さない。」

「もう！璃々いじわる！」

そういわれましても…こういう性格だし。

「で、今日どこ行こうか？」

「それじゃあ……」

話していたら、家に着いた。

門を開けて、瑠璃を中に入れて、門を閉める。

今度は瑠璃が玄関ドアを開けて、私を中に先に入れて、ドアを閉める。

「ただいま〜」

「おかえりなさいませ。おやつは何にいたしましょう?」

執事の怜がさつと飛んできた。

「ううん、今日は大丈夫よ、これから遊びに行くの。いつも通り、ね!」

「うん、だから、おやつはいいわ。疲れたでしょ、あなたも少し休憩をなさいね」

「はい、お気遣いありがとうございます」

そういつて執事は私たちが階段を上るのを確認して奥の部屋に入る。

私たちは階段を上り、自分の部屋へと入る。

「はあく疲れたあ」

鞆を机の横にかけ、制服を脱ぐ。

「さて、どれにしようか。」

選んだのは、紫のワンピース。

下には薄い、黒のレギンスを穿く。

靴下は薄紫。

鏡を見る。

幼い時に「視た」『自分』は、黒に紺色が混ざったような色をしていた髪。

でも、今はどこにでもいる黒髪だ。

あの『自分』の眼は…赤紫だった。

でも、私は黒。

あれは何だったのかな？

…こんなこと考えるのは時間の無駄か。

「これでいいかな、うん。」

今日は、久しぶりに買い物に行く。

瑠璃は文房具をかうらしい。

私はこの長い髪をとめるものを買うつもりだ。

鞆はいつもの白いシヨルダーバッグ。

「よし、オツケー！」

あ、スマホスマホ。

「これで良し！」

コンコン

「璃々、出来たよ！行こう！」

ドアを開けると、白と水色の服に、白いダッフルコート。

ツインテールのリボンは黒。

瑠璃のつやのある黒髪にはこれがいい。

いつも通り、これがいいんです。

「さあ、行こう！」

手をつないで門をでて、車に乗る。

「どこへ行かれます？」

「いつものところじゃなくて、噂の占いがあるところ、行こうよ璃々！」

「ん、占い？いいよ。占い行こうよ！」

「占い…といえばあの館ですか…。わたくしは門の前で待っていますので。」

私は前世の記憶がある。

もしかしたら前世じゃないかもしれない。

…というよりあれは確かに私の記憶な気がする。
たしか、あの中で私は占いをしていた。

気付いたらもうついでいた。

「お嬢様、到着いたしました。行ってらっしゃいませ。」

「よしっ！ 璃々、行くよ！ 楽しみだなあ！」

「あ、ちよっ、瑠璃、走るな〜っ！」

「ふふっ！ 楽しいね！」

「捕まえた！ 瑠璃捕まるの早すぎ！」

「あ！ 捕まった！ 璃々が足速すぎなの！」

門をくぐると、バラ園が広がっている。

赤色のバラ園を水色と紫がくるくる回る。

すると、館の玄関ポーチのところにおばあさんが立っていた。

「そこのお嬢さん、占いに来たのだろうか？ 館にお入り。」

「璃々、行こうよ！」

「え、あ、うん。」

私はただ手を引かれるだけ。こういう時だけ強引なんだよなあ

おばあさんは、占いができるらしい。

というか、カンらしい。占いじゃないじゃん

「ふふふつ、おばあさん、面白いのね！」

私たちは洋館の中で紅茶を飲んでいる。

「さて、占うか。」

私たちに向き直ると急に真剣な表情になった。

「ここで占ったことは三人の秘密。どんなことを知っても、

決してその運命を狂わせないように行動するように。いいかね？」

「はい。」

「それじゃあ、言うよ。」

『……………お主らは一か月以内に戻るべきところへ戻る。

それはいきなり。

記憶の中から探し出せ、その方法を。』

「…ええ？戻るべきところ？」

瑠璃は驚いている、が。

私は今までの記憶がパズルのピースのようにぴったりはまる。

『元ある場所に…呪いは解ける』

おばあさんと同時にこんなことを言った。

私は夢の中で見たのだから。

昔の私を。

「わかつているの、そのこと。」

「なんじゃ、それならヒントにもならんかったか。」

…ヒントにはならなかった。なぜなら…

「それが探していた『答え』だから。」

「ヒント？何それ？」

「瑠璃にはまだわからないわ。そして、おばあさん、ようやく確信が持てた、

ありがとうございます。私はまたこんど、クッキーでも焼いてくるわ。」

「またな、待っているぞ。」

私はいまいち話が分からない瑠璃の手を引いて、館から出るのだった。

その晩。

「瑠璃、おやすみ。」

「ん、璃々、おやすみ、また明日。」

部屋に入り、窓辺に行く。

「お姉さま、待っててくださいね。必ず、戻ってみせます。」

月は幸せそうに、光っている。

そうして記憶が戻った少女は。

いつも通り、眠りにつくのだった。

珍しい日と変わらぬ環境 前編

く瑠璃視点く

…音が聞こえる。

何の音だろ？

ん？誰かの声だ。

なんて言ってる？

「…り……………あ……………だ……………おき……………ち……………しちや……………」

ん？なに？

「瑠璃！朝だよ！起きて！遅刻しちゃうよ!？」

ちこく…遅刻……………

「遅刻うつ!?」

やばいやばいやばい!

「だめだこりゃ。ねえ、怜!先生に遅刻するつて伝えておいて!」

璃々が怜と呼んだ執事は、黒髪をなびかせながら

さつと部屋に入ってきた。

「かしこまりました。璃々お嬢様、支度が終わりましたら

朝食をお持ちいたします。

お飲み物はいつものフルーツミックスジュースでよろしいでしょうか?」

「うん、よろしく。」

「それでは失礼いたします。」

つていうか、ぼけーつと座ってる時間はないよ!

急げ私!

「瑠璃、落ち着いて。」
はっ！私は何を!?

私はお気に入りのスカートとシャツを持っていないじゃないか！

「制服着るんだよ。私服じゃ、学校行けないでしょ?」

あ……。

もうだめだあー。

と、あきらめモードになった私だった。

く璃々視点く

今日は、朝早く目覚めた。

「ふああああつ」

ベットわきのサイドテーブルに置いてあるデジタル時計は5時。

まだ家族は起きてないだろう。

いや、執事である怜なら起きているだろうか。

「電気…スイッチ…あった。」

ベットの横の棚の室内コントロールを手に取る。
とにかく全部つける。

「うわ、まぶしっ」

いきなりついた電気の明るさに目がくらむ。

目が慣れてくると、いつもの部屋。

白い壁に、フローリングの床。

黒の勉強机に、たくさんの本が入った本棚。

ドレッサーは黒で、その上には色鮮やかな髪留めやゴムが並べてある。

あ、壁掛け時計が5時15分を指している。

…そろそろ着替えよう。

今日は学校。だから、制服を着る。あたりまえ。

純白のブラウスと、黒で、ひぎの少し上までのジャンパースカート。

赤くて細いリボンを首元につける。

ボレロは着ないで、置いておく。

コートも着ないで置いておく。

というか、コートは家の中で着るものじゃないと思う。

今着たら動きにくいし……。

あ、やば。今日提出物あるじゃん。

数学と英語じゃん。

しかもやってないじゃん。

……やばい急ごう！

椅子に座り、プリントを広げて、お気に入りのシャープンを持って勉強を始めた。

——15分後——

「やっと終わった〜」

提出物である数学のプリントと英単語を何とか終わらせた私は、

それを鞆にいれて、椅子の上に置いておく。ココ定位置。

あ、45分だ。

どうしようかなあ。

そうだ、今日はお庭で朝ご飯たべよ。

早起きしたし、それくらいいいよね？

く瑠璃視点く

ただ今、朝食を食べている瑠璃だぜ！つていうのはどうでもいい！

「璃々！ほえとつえ〜！」

「はいはい、落ち着いて食べてよ。珍しいね、瑠璃が寝坊かあ〜」

いや、そんな呑気なこと言つてられないんですよ!?

「お嬢様、車の用意はできております。いつでも出発できますので。」

「ありがとう。怜。あ、瑠璃の鞆持つてきてくれる？」

「よほしう〜、怜！」

「了解いたしました、少々お待ちください。」

そういつて怜が部屋から出て行った。

…だからやばいつて。

「時間やばいよお〜」

「はいはい、喋ってないで。3時間目体育なんだってば〜」

「むぐつ。」

璃々は私の口にパンを入れる。

……パン苦手だわ。私。

急いであるときにはよろしくないと思う。

「はい、ジュースで流し込む!」

もう9時だよお…遅刻だあ〜

「ポーっとしてないで!はい!」

最後のフルーツを口に詰め込み、洗面所へ走る。

急いで歯磨きをして…オツケー!

「よし、いくよ璃々!」

そう璃々に声をかける。

「いや、待ってるのこっちだからね!?!」

ドアをあけ、門まで走る。あ、車が止まってる。

「お嬢様、どうぞ、お乗りください。」

二人で車に飛び乗る。

「出発します」

ようやく車は動き出した：

後から怜に聞いた話によると、ドライバーさんは2時間くらい待っていたらしい。
ドライバーさん：ごめんね。

く璃々視点く

瑠璃さんが盛大に寝坊しました。

はい。

「おはようございまーす…」

そういつて、教室のドアを開ける。

「「「「暁（さん） おはよう」」」」

学校に着いたのは10時を過ぎていた。

多分2時間目だろう。

ちようど国語の授業の途中だったらしい。

「すみません、遅れました。」

そういつて自分の席に着くと、隣の子が話しかけてきた。

「おはよ、璃々。今日は遅かったなあ。なんかあつた？」

「おはよう、紫音。瑠璃が寝坊したの。珍しいですよ。」

「え、あつちがあ!? マジですか!」

まあ、驚くにも無理はない。

あの早寝早起きな瑠璃が寝坊は私もびっくりしたからね…
「暁さん、プリントを取りに来てちょうだい。」

あと、華月君。今やっていたところの説明しておいてね。」

「はい」

喋りかけてきた子の名前は、華月 紫音。

クラスのリーダー的存在で、剣道部に所属している。

華月財閥の次男。

え? 私?

私は、暁財閥の長女ですがなにか?

そう、私は日本の中でも結構有名(?)な、暁財閥の長女。

父は社長、祖父は会長。母はファッションブランドのデザイナー兼社長。お父様の言い方で言うとお客様から見たらお金持ちとかになるらしい。

「ねえ、璃々？おーい、璃々〜？」

「えっ？あつ、どうしたの？紫音？」

「説明しようと思っただけど…いい？」

…聞いてなかったわ。

「う、うん。いいよ、よろしく。」

「えっと、教科書 P 59のところの漢字を最初から最後まで。ノートに書くんだって。」

このプリントのやつをヒントにしながらか解けて。OK？」

「うん、ありがとう、紫音。」

「え、ああ。」

そう言うのと、紫音はプリントを始めた。

…私もプリントしよう。

授業終了のベルが鳴るまで、黙々とプリントをし続けた私だった。

く瑠璃視点く

はい。

うん。遅刻です。

「おはよーございませーす」

ドアを開けるとそこには…

…誰もいなかった。

「はあ?」

意味わかんないよ、ほんと。

みんな揃って休み? 神隠しですか?

しょうがない、まずはこの荷物片付けよう。

あれ? 机になんか置いてあるよ?

どれどれ。

『2時間目は美術に変更されました。美術室に来てください』

「あ、なんだ、美術か。」

そうでしたか。皆様美術室にいらっしやいますか。
もうすぐチャイムなるから移動するのやめよ。

——5分後——

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り響く、それと同時に廊下が騒がしくなった。

「あ、瑠璃おはよ〜」

「暁さんおはよ〜」

みんなが教室に入ってきた。

「なんかあったの?」

1人の子が走ってきた。

「いや〜それが寝坊してしまってます〜」

「え?! 璃々が寝坊!? 珍しすぎる! 明日嵐でも来るのか?」

オーバードリアクションな私の親友、れいぜい 冷泉 ゆうな 祐奈。

いつも一緒に、唯一無二の存在です。

髪型は前下がりボブ。サイドにオレンジ色のピンをつけている。

「おい、祐奈、明日はもともと嵐の予報だろ?」

そう言いながら近くに来た男子は九十九つぐも 青空くんせいから。

噂によると、璃々のことが好きらしい。

祐奈の幼馴染。

「あ、そうか、忘れてたよ青空くん。」

「祐奈ん家、気象庁の人だろうが。忘れてどうすんだよ。つていうかくん付けで呼ぶな

気持ち悪い! 普通にいつも通りの呼び捨てでいいだろ」

「銀行の人が何言ってるのさ。もう。」

「あのさ、私を置いていかないでくれる?」

「暁財閥の令嬢が何言ってるの」

「あ、はい、すいません」

私なんか言っちゃった。

「まあまあ。落ち着きなつて。あと5分で数学だよ。」

今話に入ってきたのは、青空の友達いすみの和泉きょうや 鏡夜くん。

クラスで一番足が速くて、数学が得意らしい。

「数学嫌だわ」

お、見事にハモツた。

「ハモリ綺麗すぎて一瞬息するの忘れた。」

「鏡夜、大丈夫だ、今息してるからな。」

「あと2分ですが。瑠璃急げ」

「やば、準備してない」

「あ、またハモツた。」

準備しなくちゃ…やばいやばい。

「それじゃ、またあとで！」

「またね」

自分の席に着くいつもの4人組だった。

珍しい日と変わらぬ環境 中編

く璃々視点く

国語の授業が終わり、休憩時間……

「やった体育だ〜っ！」

体操服が入った袋を持ち、更衣室へと走る。

「璃々ちやくん、待ってよお〜！」

私を追いかけて走ってきたのは、幼馴染の

九十九つくも真澄ますみ。

ニツクネームはましゆ。シンプルだけどどこか可愛い。

瑠璃と同じクラスの、青空のいところ。

「はあ、はあ、璃々ちゃん速いんだから、置いてかないでよ〜！」

「ごめ、体育だから、嬉しすぎて……」

「体育の時間は、一週間に2回だけだから、テンション上がる。」

いつものおとなしさが吹き飛ぶくらい。
あれ、いつもおとなしいっけ？

「よっし、着替え終了！」

さつと着替えた私たちは、体育館のある南棟へ向かう。

「ちよ、まって、走らないでえ〜！」

……ましゆのことおいてきちやった。

「もう！走るなって…言った、じゃん！」

「だからごめんってばー」

「棒読みやめて！体育館に着いたよ！」

「やったーっ！」

「…キャラなんて見なかった、いいね？」

く瑠璃視点く

「起立、気を付け、礼！」

「」「お願いしまーす」「」

めんどくさい数学が始まった。

「なあ、瑠璃、教科書見せて！」

ほかのクラスのやつに貸したままなんだよー！」

そう話しかけてきたのは隣の席の青空くん。

「ん、いーよ、数学の問題も半分ね！」

「よしやつ、ありがと！」

「はい、皆さん、今日は教科書のP126をひら……かなくていいです！」
「……は？」

おいおいおいおい、ちょっと待て！どうゆうこと!?

「今日は今からコンピュータールームに行つて、みんなでゲームしまーす！」

おとおおおお？

「「「よつしやあああああつ！」「」」

「さあ、静かに移動してちようだいね！」

「瑠璃、やったね！」

前の席の祐奈がそういつて私の上着を持って、立ち上がった。

「うん！祐奈っ！」

「二人で喜んでないで俺も入れろよ〜」

「えー。青空はダメ〜」

祐奈に一蹴された青空くん。ああ、かわいそうに。

「俺も入れてくれよ、3人とも！」

「鏡夜ならいいよ。」

祐奈は地味に意地悪だね、うん。

「そのこの4人。鍵閉めるから早く出てよね！」

…怒られた。

「「ごめん、学級委員！」」

4人で並んでコンピュータールームに向かった。

〜璃々視点〜

キーンコーンコーンコーン

「休め、気を付け、礼！」

「「「お願いしまーす」「」」」

ようやく体育の時間がやってきたッ！

「はい、今日はテニスやるよー。」

「よっしゃー！」

「璃々…キャラ崩壊してるよ。」

知ってるよ、ましゅさんよ。

大好きなテニスの時間です〜！

「ラケット、ロッカーから持ってきてね〜」

「「「はーい」「」」」

「チーム戦するから、男女でチーム組んで！」

「「「「はーい」」」」

ロッカーから取り出したラケットを取り出して、周りを見る。
さて、私は誰としようか。

「せんせー、どうやって決めればいいですか〜?」

「隣の席の子でいいよ、こんど先生決めてくるから!」

「「「「はーい」」」」

さつきからはーいってばかり言ってるね、みんな。

「璃々、俺とだぜ!よろしく!」

あ、そうか。

「隣の席、ふうま楓真君だったね!」

私のクラスは、男子、女子の交互の列になっていて、

左側の男子とペアなのだ。

私の隣は、あまがみ天上 ふうま楓真君。

運動神経がよくて、推薦でこの学園に入ったらしい。

「よろしくなっ！」

明るい性格で、はきはき喋る。しかも、普通にかっこいいから、結構モテるらしい。

そういえば席替えの時に何人かから変わってくれて言われたなあ。一人男子が混ざってたけど。

「よろしく、楓真君！よしっ、そんじゃ相手叩きのめすか！」

「お、おう……」

あれ？楓真君がびつくりしてるけどどうしたのか……？

「ごめんね、楓真君。璃々体育になるとキャラ変わっちゃうんだよ……」

「ましゅ、無駄なこと言わなくていいんだよ？」

「あつ、ごめんねえ〜」

ピイイイッ

試合が始まると同時に、私はコートしか見えなくなったのだった……

く瑠璃視点く

カタカタカタカタ

ただいまゲームの真っ最中！

一応、数学の時間である。

マインクラフトっていう、世界がブロックでできているゲームで、

$30 \times 30 \times 30$ の立方体を作るんだと。

そして、その立方体の中に、 $2 \times 2 \times 2$ の立方体をたくさん作るらしい。

……というか、もう終わった。

「先生、終わったらどうするんですかあ〜？」

「先生を呼んでくださいね〜」

「それじゃあ先生来てください」

「……え、終わったの!?!」

「はい、このゲーム結構よくしてるんです。」

私は休みの日に、マインクラフト、通称マイクラをよくプレイしている。

最初は璃々がやっていて、何となくやらせてもらったんだけど、

そこからはまっちゃったから…

「ほんとだ、瑠璃のできてる、スゴイ！」

「瑠璃さん、後は自由に遊んでていいですよ〜」

「はい」

後は建築したり、サバイバルしたり…

授業終了のチャイムが鳴るまで、マイクラを楽しんだのだった。さすがにサーバーに入るのは無理だったけど。

キーンコーンコーンコーン

「起立、気を付け、礼」

「」「」「ありがとうございました」「」

チャイムが鳴るとすぐに、祐奈が飛んできた。

「瑠璃、ゲームもできるの!?!なに? お嬢様はそこまで完璧じゃないといけないの!?!」
いや、そんなわけないじゃんか。

「これは私の趣味だよ、祐奈。」

あ、鏡夜君もはやかったよね、鏡夜君マイクラやってるの?」

鏡夜君はブロックの色を何色にするか迷っていたらしい

それが無かったら鏡夜君が一番だったと思う。

「自慢することじゃないけど、これでも鯖主だよー」

「あ？鯖主って何、鏡夜？」

青空くんが恐ろしいものを見たような顔で鏡夜くんの方を向いた

「ちよ、青空怖い。」

「鯖主っていうのは、マルチサーバー運営してる人のことだよ」

「へー」

私は基本マルチプレイはしないんだよね：

さつき鯖に入ろうとしたのはやれるか確認したかっただけ。

「それよりさ、4時間目、何だっけ？」

私がそう聞くと：

「理科」

三人が同時に答えた。

「あはははっ、またそろった」

「知らない」

「あはははっ、またそろってる〜」

「「なんでそろえてるの?」」

なんか気持ち悪いくらいぴったりだね。

「……そろそろやめようか。」

「「はい。」」

「ぐあーっ!なんでそろうんだあー!」

鏡夜くん…

「ドンマイ!」

あ、またそろった。

まあ、今のは私と祐奈だから問題ない!

「まあまあ、そろそろ準備しようか。」

「「青空が言うなっ!」」

「「……揃いすぎ。」」

揃いすぎて怖い4人組だった…

く璃々視点く

キーンコーンカーンコーン

「「「「ありがとうございまして」」」」

「いやく璃々強いなあく」

「楓真くんのスピードも侮れないよく」

「おい、璃々。お前真澄に置いてかれてるぞ」

「え？そんなことがあるわけ…」

あつた。ましゆが結構前の方歩いてる。

「あー！ー！ー！そんじゃばいばい！」

私は走り出した…ましゆに追いつくために。

珍しい日と変わらぬ環境 後編

く瑠璃視点く

キーンコーンカーンコーン

「それじゃ、このワークの113から115まで宿題！以上！」

「起立、気を付け、礼！」

「「「ありがとうございます」」」

4時間目の理科もなんとか終わり、机の上の片づけをする。

「瑠璃！青空！鏡夜！お弁当食べに行こ！」

「今日の弁当のメインディッシュ担当誰？」

私たち7人（璃々・祐奈・真澄・青空・鏡夜・紫音・私）は、毎日の弁当を担当で割り振りしている。

簡単に言うと、ご飯係、おかず係1、おかず係2、スープ係、デザート係、お茶係、準備係。

「今日は璃々が持つてくるよ。朝早起きしてたし、結構自信あるみたいね」
「瑠璃がそう言うなら間違いないな。」

「デザート担当は〜?」

甘党の鏡夜くんがそう聞く。

「俺!今日はクレーム キヤラメルだぜ!まじでプリン大好き!」

「青空:まだまだまだお子様ね…」

「祐奈に言われたくない!」

「むむむ……………」

2人が火花を散らしているのを横目で見ながら、ロッカーに荷物を取りに行く。

よしよし、今日はちゃんとティーポット持つてきたぞ!

…なんてことを考えていたら、鏡夜くんがやってきた。

「ねえ、瑠璃。あの2人つてどっちも同じくらいお子様だよね。」

「まあ、そうなんじゃない?鏡夜くんが大人すぎるのかもだけどね。」

「いやいや、それほどでも。それより、荷物持とうか？ティーポット入ってるんだろ？」
なぜばれたし。

「じゃあ、半分お願い！」

「任せましたーつと。それじゃあ、あの2人何とかするから、

先に璃々と紫音と真澄を呼んできてくれる？」

「ん、了解しましたー！」

私はシートとかが入っている方のバスケットを持って、廊下に出る。

さて、璃々のクラスに行こう！

璃々は1組。私は3組なのだ。

だから、すぐそこに教室がある。

近くて便利、すごいね！

なんて当たり前のこと考えていたら、誰かにぶつかった。

「いててて…」

「す、すいませんっ！つて、紫音じゃん！」

「あ、瑠璃。遅刻乙！瑠璃見なかったか？」

さらつとむかつくこと言われた…

まあ、それは置いといて。

……瑠璃がいないだど!?

「え？見てないの？私今探しに来ただけだど…」

「真澄が探してくれてるんだよ。瑠璃どこ行ったんだろ…」

珍しいな…なんかあったのかな？

「心配なら探してこれば？…あ、瑠璃。」

なんだ、心配して損した。すぐそこにいるじゃん。

「瑠璃！どこに行つてたんだ？」

過保護な親みたいじゃん紫音。

「紫音、心配かけたみたいでごめん。」

あ、瑠璃！どうしよ、バスケットの鍵が見つからないの！

「鍵…あ、私サブキー持つてるよ。」

私の家のバスケットには鍵が付いている。

璃々は鍵を忘れてきたようですね…

私より早く起きてたのねー

「なーんだ！ならいいじゃん」

「あのさ、そろそろ移動しようぜ。真澄にはメッセージ送ったからさ」

「はいはいー！」

「お前ら元気いいな…瑠璃、今日のデザート何だつて？」

紫音も甘党。

「プリンみたいよ。青空が「プリン大好き！」って叫んでたから。」

まあ、いつものことだけど。

「そ。屋上行こ〜」

璃々が飽きたのかそういった。

いや違う、荷物が重いのか。

「ねえ、俺もいろいろ持ってくるから先行つててくれない？」

「いつてらっしやーい」

屋上のドアをマスターキーで開けると、そこには花壇がならんでいる。私たち7人で育てた花だ。色とりどりで、とてもきれい。

「瑠璃、シート敷いてくれる？」

「ん、おっけー」

バスケットから取り出したシートを花壇に囲まれるように設計された中心の空間に広げる。

そして、そのシートの上に、屋上の専用倉庫から取り出した低い机を置く。

その上にも別のシートを敷いたら……完成！

この南棟の屋上は、私たちしか入れないようになっている。

私のお父さんが学園長の知り合いだったらしい。コネってやつだな。

おかげでみんなとここでおしゃべりできるから、お父さんには感謝だよ。

「疲れたね、璃々。」

「そうだね、瑠璃。」

そんなことを言っていたら、ましゅちゃんが出てきた。

「ちよつと〜璃々！もう！ほんとどこ行ってたの！」

「……許して……」

「あ、うん、許す。」

許すのはやつ!?

「ありがと！これ広げるの手伝って！」

「はいはい！」

渡されたのは、大きいテントの柱。

それを、さっき敷いたシートより外側に柱がくるように置く。

「お。二人ともお疲れ〜」

そう言いながら紫音が入ってくる。

「ありがとさ〜ん」

祐奈と鏡夜くんもやってきた。

「デザートはプリン……ムフフ」

あ、青空……く……ん？

「あ、青空はほつといてね。プリンという名の麻薬で脳内いっぱいだから」

「祐奈、それはひでえよ〜」

……祐奈があつてると思う。

「ね、君たち、早く座つてよ。俺食べたい。」

「はーい」

いつの間にか紫音が座っていた。

ま、そんなことはどうでもいい！

今は……

「」「」「」「いただきまーす！」「」「」「」

「あ、これうまい！このサンドウィッチ…生ハムだつ!!!」

「あ、鏡夜、ありがと！結構大変だったよ（；・ω・）」

璃々がおかしい。

「言葉に顔文字…（・▽・）あ、俺もできた！」

紫音と璃々の二人はもう会話法の次元が違うよ。もう。

「何それ、異次元なんだけど。あ、ましゆ、そこのサンドウィッチとつて！」

「はい、祐奈。落ち着いて食べてね？」

「ありがとう。ん！瑠璃、この後は何する？」

「んん。みんなどうしたい？」

と聞いてみると…

「「「コンピュータールームに行こう！」「」」

……全員同じとか…怖い…こともない。

同じっていうのは一日に何十回もあるからね！

主に、祐奈&青空&鏡夜&私のせいだ！

「おし、決定！」

「じゃ、早く食べてさっさと占領しようぜ！ペンタブ使いたいんだけど…」

紫音がこう言う。紫音はスポーツ一筋に見えなくもないが、

本当は、ゲーマー&絵描きだったりする。何でもできるイケメンとはこのこと。

それを言ったら殺されそうだけど。

「ペンタブなら、私の分貸すよ。」

「え、いいのか!? 璃々!？」

璃々は電腦部で、パソコンしたり、絵をかいたり、動画を作ったりしてららしい。

「うん、じゃあ、私はプリン一つ目頂き！」

「[[[[ぎゃー……]]]]」

璃々がプリンのお皿を手にとると、青空・祐奈・紫音・真澄の悲鳴が響く。
まるでプリンの亡霊だね。

「お前ら、うるさい。」

鏡夜くんは大人である、ほんとに。

——15分後——

「[[[[[[[[ごちそうさまでした]]]]]]」

「いや、今日のサンドウィッチおいしかったなあ」

これは、璃々が喜ぶね

「珍しいね、紫音と青空が揃うの。」

確かに、結構レアだと思う。

「こいつが合わせるのが悪い」

「あ？お前が悪いだろ」

「…なんでマネするんだよ」

「はあ？そつちがやめろ！」

「…なにこれ、気持ち悪っ」

「祐奈と真澄も揃ってるし…」

鏡夜くん…O型って怖いね。と、目で伝える。

言いたいことが伝わったようで、鏡夜くんもうなずく。

「いや〜でもプリンやっぱ最強！うまい！」

あ、プリン半分くらい食べた青空が乱入してきた。

「『『『黙りなさい』』』」

みんなハモツた。凄い綺麗に。

「……はい、すいません」

この後、片付けをして、コンピュータールームで、予鈴が鳴るまで遊んだ7人だった。

「よしや！瑠璃！勝ったぜ！もう一回、な？」

「う〜ん…もう無理〜」

「ああ、プリンくいてえ。」

「『『『青空は黙って』』』」

やっぱ、おもしろいね、このメンバー。

「ねえ、璃々。こんな幸せな日が続けばいいのにね！」

「え？あ、うん、そうね」

璃々のぎこちない返事。

なんかあつたのかな……？

↳ 璃々視点↳

|| || その晩 || ||

「瑠璃、おやすみ〜」

「ん〜、おやすみ、また明日。」

私は瑠璃に挨拶をして、部屋に入った。

ベットには行かず、出窓に座って、持ってきた紅茶を飲む。

このまま璃々として生きるのもいいかな。と。

…こうしていると、思い出す。

あの、“人間じゃなかった”頃のこと。

私は、私であつて本当の私ではない。

本当の私は…

「ヴァンパイア吸血鬼であり、魔法使いなんだから、ね？」

もうあの時呪いの日から330年。

お姉さまたちはどこに暮らしているのだろうか？

知らない土地に引越したかな？

それともそのまま残つてるかな？

まあ、それは探せばわかるだろう。

飲み終えた紅茶のカップをテーブルに置き、私はベットに向かう。

「変わらない日常なんて、存在しないのだから」

そして、私は眠りについた…

…彼女達が眠った後、月はその姿を見て、ほほ笑んだ。

優しく、だが力強く。

彼女^大が探^切す者^なたち^モを。
彼女自身を。

その光で包み込んだのだった…。

キヤラ紹介 part 1

あかつき
暁 璃々

歳：14歳（中1）

誕生日：6月6日

身長：158cm

好きな食べ物：焼きプリン・ラーメン・サラダ

お気に入りのもの：この前買ったパレット

部活：電脳部（コンピューターを扱う部活。別名ゲーム部）

週一、水曜日のみ。

弓道部（弓です、はい。）

ほぼ毎日あり。自由参加

プロフィール：暁財閥の長女。双子の姉。

紫色と黒が好き。な色。

髪は生まれてから一度も切ったことがないため物凄く長い。

宝物は瑠璃とおそろいのキーホルダー。

体育が好きで、体育になるとキャラが変わる。

この話の主人公の一人である。

見た目によらずゲームが好き。

年の割に大人びているせいで子供っぽくないとよく言われる。

あかつき
暁 瑠璃

歳：14歳（中1）

誕生日：6月6日

身長：156cm

好きな食べ物：チーズケーキ・パスタ・から揚げ

お気に入りもの：最近買ったシャープペン

部活：華道部（フラワーアレンジメントもします。）

週一、水曜日のみ。

ファッション部（デザインしたり、作ったりしてます）

ほぼ毎日あり、自由参加。

プロフィール：暁財閥の次女。双子の妹。

緋色と黒が好きな色。

璃々と同じく、髪を切ったことがないため物凄く長い。

宝物は璃々とおそろいのキーホルダー。

あと、生まれた時から持っているネツクレス。

数学が嫌い。理科も無理。だが、国語&社会が得意！

この話の主人公の一人である。

音楽の才能があつたりする。

璃々の隣の席（右）

華月かつぎ 紫音しおん

華月財閥の次男。剣道部。

身長：168cm

誕生日：11月11日

瑠璃「あの人、イケメンだね。うん。」

鏡夜「俺、あいつには成績負けたくない。」

真澄「謎の対抗心：それ必要？」

璃々のことが好きらしい。

瑠璃の親友

冷泉 れいぜい 祐奈 ゆうな

気象庁のお偉いさんの次女。天文学部。

身長：159cm

誕生日：9月26日

璃々「なんというか：うさぎみたいな？」

青空「璃々、あいつはうさぎじゃないぞ。りすの方だ。」

紫音「あいつ、かわいいところあるんだけどな…」

璃々「紫音、幼馴染だったんだっけ。忘れてたわ」

祐奈の幼馴染・紫音のライバル

九十九 つくも 青空 せいら

銀行のお偉いさんの長男。バスケット部。

身長：169cm

誕生日：2月4日

璃々「紫音と睨み合いしてるけど、なんで？意味わかんない。」

瑠璃「それな」

楓真「ほんと、意味わからん」

璃々のことが気になるとかなんとか。

青空の大親友・瑠璃の隣の席

和泉いずみ 鏡夜きょうや

書道の先生の長男。書道部。

身長：162cm

誕生日：8月17日

瑠璃「落ち着いてるように見えて…そそっかしいといえますか…

あ、私が言うことじゃないや」

祐奈「瑠璃が言うことじゃないね、うん。」

真澄「お、落ち着きなら私の方がありますよっ！」

一同「…」

璃々の隣の席（左）

あまがみ
天上 楓真

スポーツ推薦で、この学園に入学。陸上部。

身長：165cm

誕生日：10月26日

瑠璃「なんかキラキラしてる。」

祐奈「それな〜というか、めっちゃ走るの早いんだって」

青空「璃々と0.5秒も違うらしいぜ」

璃々の大親友

つくも
九十九 真澄。

銀行のお偉いさんの次女。書道部。

身長：160cm

誕生日：7月12日

ニツクネームはましゆ。シンプルだけどどこか可愛い。

瑠璃と同じクラスの、青空くんのいとこ。

頭がよくて、成績学年2位。

鏡夜「真澄にはかなわないよ…」

楓真「ところで、1位って誰でしたっけ？」
全員「……………誰だっけ」

始まりは終わりへ。終わりは新たな始まりへ。
少女たちは一歩踏み出した

くフランドール視点く

私は何をしているのだろうか？

この薄暗い地下で一人きり。

……何が悪かったのだろうか？

もう顔すら思い出せないお父様とお母様を壊したこと？

そんなことだった？

「違う。私は…確かにあった『大事なモノ』をなくしたんだよ？」

「フラン、それがなんだか、わかるの？」

「いいえ、分からないから困っているのよ、私。^{フラン}330年も。」

「そうよ、フラン。^{フラン}私も同じ気持ちだわ。」

「私もよ。」
フラン

「「そうね、みんな同じね。」」

私は、330年くらい前に心の支えだったものをなくした。

それが何だったのか。それとも誰だったのか。

それがワカラナイの。分かれば楽なのに、ね？

フォーオブアカインドの時間が終了した。周りの私がぼやけていく。
フラン

「フラン〜？はいるわよ〜？」

一週間に一回遊びに来てくれるレミアお姉さまだ。

「ん、どうぞ、お姉さま。」

「これからお客様が来るのよ、あなたも来る？」

行きたい。でも…

「壊してしまわないように、ここにいるわ」

いつもこれを選んでしまう。

ああ、いつまでたっても、私は弱いままだなあ。

怖がりなんだよ。

あの時もそうだったなあ。大好きだったお父様とお母様を壊してしまったあと。妹を傷つけたくなって……あれ？

私に……妹なんて……いた？

いるわけない。

だって、私は家族はお父様とお母様とお姉さましかいないもの。

あーあ。

「強くなりたいな、大事なものを自分で探しに行けるくらいに。」

ベットに転がり、そう言った。

その声は、窓一つない薄暗い部屋の中で反響し、誰にも届くことなく消えたのだった。

くレミリア視点く

「うー。咲夜あ、紅茶〜」

「かしこまりました、お嬢様。」

私の大切な、完璧で瀟洒なメイドの咲夜はふわりと部屋から去っていく。

彼女は『時を操る程度の能力』を持っているが、普段は使わせないようにしている。何かあつた時に大変だからだ。

「お嬢様、失礼いたします。紅茶をお持ちいたしました。」

そつとドアを開け入ってきた咲夜は私の大好きな花の香りを振りまく。

「あら、咲夜。あなた香水でもつけてるの?」

「あ、ばれましたか。お嬢様が大好きなバラの香りでございます。」

「そう。大切にしなさいよ。」

「はい!お嬢様!」

何もかもが完璧に見える咲夜だけど、ほんとは違う。

まず、褒められたりするのが好きで、何かと無駄に頑張る。

あと、人の気持ちを考えるのが苦手で、いつも悩んでいたりもする。

「はい、紅茶です」

「ありがとう、咲夜。ところで、今日の予定は?」

「今日ですか…？えっと、パチユリー様のところに魔理沙とアリスが来ておりますが。」
「私たちの予定よ、何かある？」
「いいえ、ございません。なにかご不満でも？」

「そうね…じゃあ、私は部屋の本棚の片づけをするから、あなたは手を出しちゃだめよ？」

「うぬぬぬ…」

私がおかしうしようとすると咲夜がすべて片付けてしまう。

正直に言うと、やることなく暇なのだ。

この前起こした異変の時は違ったけれど、ね。

「それじゃあ、6時頃に呼びに来てちょうだい」

「ぐぬぬ……。了解しました」

私は紅茶を飲み終え、自分の部屋へと向かうのだった。

「さて、始めましょうか。」

まず初めに、本棚に入っているものを一つ一つ手作業で取り出す。

そして、反対の壁際にもっていく。

次に、その本の仕分けだ。

よく読む本、読まない本、いらぬ本、いる本で分けていく。
すると。

「なにこれ、『れみりあのにつき』？こんなを書いてたかしら」

気になるわね。私は何を書いていたのか。

「えっと、なになに？6歳　○月□日？」

—6歳　○月□日—

きょうは、わたしのだいすきなもうとのフランのたんじょうび。

みんなでおおいわいて、フランもたのしそうだった。

「あ、ちょうどフランの誕生日じゃない！こんなこともあったのねえ」

—7歳　△月○日—

フランとお勉強をはじめた。もじはむずかしくて、

なんこもおぼえなくちゃいけないけど、とつても楽しい。

だって、フランと一緒にできるから！

「滅茶苦茶ね、この文章。」

—8歳 ☆月△日—

今日、妹が生まれた。

双子で、とつてもかわいかった。

姉の方がリリエラで、妹の方がルリアになった。

これからが楽しみだな。

「私、変な夢を見たのね。それかきつとお人形でも貰ったんだわ」

—9歳 △月★日—

妹三人と、私で、ピクニックに行った。

リリエラとフランが追いかけてこして遊んでいた。

ルリアと私は、それを横目で見ながらチエスをして遊んだ。

こんな面白くて幸せな日が続きますように。

私はその日記を落とした。

「ど、どういうこと？二回も出てくるなんて…」

私には…フラン以外の妹がいるってこと？」

他のページにもその名前がたくさん出てきていた。

「お姉さま！ちよつと聞いてほしいの！」

フランが部屋のドアを開けて入ってきた。

「私も聞きたいことがあるわ！」

「あのさ、私に妹、いるの!？」

「私にフラン以外の妹がいるの？」

「ほんと、どういうことだろうね。」

フランは夢を見たらしい。黒っぽい色の髪の子と、手をつないで庭を散歩していたらしい。

顔は見えなかったという。

「なんか、見ようとしても、意識がぼやけていってその子、なくなりそうになる感じがしたわ」

「私の日記、読んでみてちょうだい」

「え…なにこれ。ほんとに…いるってこと？」

私たち二人はその場で十分くらい固まったのだった。

くパチユリー視点く

「パチユリー様、本の片づけ半分終わりましたあ〜」

「ん、こあ、ありがとう」

「あー疲れた。疲れすぎて小悪魔じゃなくて墮天使になりそう」

「こあ…あなた休みなさい。頭がおかしくなってるわよ」

「はいいいっ！休ませていただきますっ！」

ここは大図書館。私の部屋でもある。

私はパチユリー・ノーレッジ。魔女で、本好き。

私が今目指しているのはただ一つだけ。

かつて共に研究した双子の姉ともう一度実験すること。

このスカーレット家には、代々伝わる伝説がある。そのうちの一つに、双子の呪いというものがある。

「はあ。寝ようかなあああつ」

私がそう言いながらあくびをすると、寝かせないとばかりに天窓から誰かが入ってきた。

「あら、魔理沙いらっしやい」

「よつ、パチュリー！お邪魔するぜ！本返しに来たぜ！」

魔理沙はいつも借りパクばかりだったけれど、何故か最近返しに来てくれるようになった。どうやら適当に持って行った本が呪いの本だと気付かなくて開けたら家の中で雨が降ったとか。

「あら、ありがとう。そのこの机の上に置いておいて。紅茶入れてくるわ」
「おつ、よろしく〜！」

二日に一回は魔理沙が来てる気がするのだけど。

「そういえば、あの研究、進んでるのか？良ければ手伝うけど？」

「え？あ、うん。お願いしてもいいかな？」

「よっしゃー！それじゃ、家から荷物持ってくるZ E！ついでにアリスも呼んでくる」
私は、魔理沙はいい子だと思う。

ほんと、いつもツンデレ？つていうの？それみたいな扱いにされているみたいだけ
ど。

もう一人の魔法使いであつて、

魔理沙の友達の人形使いのアリス・マーガトロイドの方がツンデレよ。

「こあ、疲れたなら先に寝てていいわよ。」

「ふえっ?! いえいえ、私、パチュリー様が寝るまで起きて、ましゅよお〜」

パタンという軽い音を響かせ、私の使い魔はソファーに倒れた。

「はあ、眠いならそういえばいいのに。あれ？言つてたね」

魔法で運んできた毛布をかける。まあ、悪魔の一種らしいから毛布なんかなくてもい
いらしいが。

おっと、話がそれた。スカーレット家の双子の呪いについてだ。

その呪いにはこの家の地下にいる『呪いの番人』という存在が管理している。

向こうの方が上手らしく、どこにいるかはよくわからない。

だが、その呪いを解く方法はもうわかっている。
あの子たちに会えばいい。

きつと、この幻想郷ではないところ、すなわち、『外界』にいる。

呪いを解く方法、呪いの種類が分かったのは、この大図書館に置いてあった『図書日記』

のおかげだった。

双子の姉のリリエラが毎日この大図書館にきて残したものだ。

その日記は330年前で記録が終わっている。

その日記に残されたほんの少しの記録と魔術研究メモなどの彼女のノートから彼女がどの魔法をかけられたかがわかった。

記憶消去、時空転移、場所転移。

その他にもヴァンパイアの弱点である日光や流水などが効かなくなる魔法。

まあ、私は探していない。その魔術研究メモなどをまとめただけだ。

「おーい、パチュリー、とつてきたぜー！き、やるぞー」

「お、お邪魔するわ、パチュリー。」

「うん、じゃあこれをこうして……」

「あ、それ得意だから任せて！蓬菜、上海、お手伝いよろしく」

「じゃあ私はこつちをやるぜーつと、んー、こうするべきなのか？」
めんどくさいけれどおもしろい研究が始まった…

「ふいーかんせーいっ！」

「やったー！」

六時間も頑張った。もう4時だ。

こーやって完成するとなぜか物凄くドキドキする。

「それにしてもこれ、何に使うの？」

「魔法探知だと。霊気もわかるらしい」

「へえ。あなたらしくない…でも面白かったわ、ありがとう」

「アリス、私こそありがとう。とても助かったわ」

「いやー疲れたなあ。お菓子お菓子……」

私たちがソファアでぐでーつとしているといきなりドアが開いた。

「パチュリー、いるかしら！ちよつと用があるの」

レミイが入ってきた。後ろにはいつもお馴染みの従者と……

「フラン!？」

「あ、パチュリー、お久しぶり」

「あのさ、館の主である私を無視して妹を見るとは…」

「大切な話みたいだから私は帰るわね、ちよつとつかれたし」

「ええ、そうしてくれるとありがたいわ。フランが来たってことは大事な用みたいだから」

「そんなじゃ、私も帰るぜー」

「あ……ばいばい、魔理沙。」

「そんな寂しそうな顔するな！また来てやるって」

「うん！またね！」

私そんな顔してたかしら…

「魔理沙、行くわよ〜」

「ああ！」

二人は窓から出て行った

「あの二人…何のために門があると思っっているのかしら」

「で、用って何、レミイ」

その答えはレミイではなく、フランから発せられた。

「あのさ、私に妹っている？」

「え？」

まさか、魔法が解けた？

「あ、何か知っているのね、教えて。パチユリー」

「顔に出ていますよ、パチユリー様」

くっ…咲夜まで敵か

「しょうがないわね。でも、今から話すのはすべて真実とは限らないわ」

私はこうして話し出す。

呪いによってどこかに行った双子の姉妹のこと。

その呪いを解く方法を。

未来はすでに始まっている。

（瑠璃視点）

最近、璃々が変だ。

いや、もともとおかしなところもあったし、

何考えてるかわからないし、

十分変なんだろうけど。

いつもと違う。

朝早起きになったし、今までそんなに食べなかつた肉類を

普通の人並みに食べるようになった。

これは私的に嬉しい。

でも逆に、家に帰ると図書館に出かけたり、書齋に籠ったりしていて、

体育大好きな璃々らしくない。

他にも、ぼーっとしていたりというより

思い詰めている感じがしたり。

今日だってそう。ずる休みしている。

本人には大事ならざるでもないと思う……けど。

「ま、気にしたら負けか！」

「おい瑠璃、いきなりどうした。授業中だぞ」

隣の席の青空君に言われるまで気づかなかったわ。

「はっ！忘れてた！」

ごめん、訂正する。変なのは私だった。

く 璃々視点く

今日は学校を休んだ。休んであの占いの館に行った。

おばあさんに聞きたいことがあったからだ。

「こんにちは、お邪魔します」

「あらあら、お客さんね、ちよつと待っててね」

あれ？おばあさんではなくお姉さんが出てきた。

「お客さんですよ」

「なんだい、よんだか？おお、璃々じゃないか」

奥の方からポンチヨのようなものを

羽織ったおばあさんが出てきた。

「一つ聞きたいことがあつて。」

「そうか、それなら入ってくれ、寒いからな」

「ありがとうございます」

この前とは違う部屋に入った。

あの部屋が占いをする客間なのだろう、

この部屋は私の本家にある客間と少し似ている。

「話は分かつておる。お主の探し人……いや、

人と言つていいのかわからんが。

その探している者がどこにいるのか、じやろう?」

「ええ、話が早くて助かります。」

「その者たちは現在、この国にいる。

正しくは、この国の中だが、この国ではないところだ。」

「ん?この国であり、この国ではない?」

まるでなぞなぞですな……

「ああ、空間が異なるのだ。結界がはられているようだな。」

結界と言われた瞬間、答えが出てきた。

「まさか、ほんとに存在するのですか?！」

「ああ、存在するとも。」

「幻想郷は。」

外部からの接触は不可能に近く、内部からの接触も0とは言えないが、非常に難しい。

「なんだ、これもまた分かっていたのか」

「いいえ、分かっていたというよりは候補には入れていたけれども

確率的には0に等しいものでしたから」

「ということとは、璃々、お主もまた」

「この人には嘘は通じない。だから言うしかないのだ。」

「ええ、妖怪のような存在です。」

「ほう、それなら教えてやろう。博麗神社という山奥にある寂れていて誰も近づかない神社に行くといい。きつと向こうの世界に入れるだろう。こつちに戻るのは難しいかもしれないがな。」

「そうか、やっぱりそうなのか。」

そもそも幻想郷は忘れられないと行けないらしいからなあ…

「ありがとうございます、決行するのはいつがいいでしょうか……？」

「そうだな、明日から冬休みだろう？」

「はい、1月9日までです」

「それならクリスマスになる前に。」

「23まで、ですね」

「ああ、できるだけ早い方がいいだろう」

「それでは、私は用意をしたいと思しますのでここで失礼いたします。

今までお世話になりました」

「ああ、だがきつといつかまた会える。」

「さようなら、ありがとうございます。」

「自分らしくあれ、自分は他の誰かには演じられないのだから」

「はい」

「無理なものは無理なのだ、それは気をつけろ」

「はこ」

私は部屋を出る。

もう悩む必要はないのだから。

もうやるべきことは見えている。

家に着くと私はやるべきことをすべてやった。

持っていくものをさっとポストンバックに入れる。

私は紫、璃々が水色。

服やらなんやらと即戦力になりそうな武器。

「さあ、準備はできたね。」

く瑠璃視点く

ごめんやつぱり訂正する。

「璃々は変だ」

今日は学校に行かなかっただけじゃなくて、私ที่บ้านに帰ると、旅行の準備みたいなのをしていたから、明らかに変。

でも、悩み事は吹っ切れたって感じがする。

朝とは全然違う、どこかさわやかさを感じる。

「どうしたの瑠璃。おやすみ、はやく部屋に行きなよ」

「あ、うん、璃々おやすみ！」

そう元気に言うのと、璃々の顔が少し暗くなる。

そうみえたが気のせいだったのだろう、ぱつと明るいつもの笑顔になった。

部屋に入って窓際に行く。

窓の横にあるドレッサーの引き出しを開けると

ネックレスが出てきた。

生まれた時から持っているというネックレス。

三日月の形をしている。璃々がこのペアを持っているけど、

それも三日月だけど、真ん中と外側がないと満月にならない。

誰がこのもう二つのパーツを持っているのだろうか？

それは今はわからないけれど、それがわかるまでこれは大切にしたい

というより、大切にしないといけない気がする。

私はネックレスをしまい、ベットに入る。

「おやすみ、お月さま」

その晩、月は全てのものに始まりを告げた。

これからの少女たちの未来を見た占い師にも。

まだ何も知らぬ双子の少女の片割れにも。

結末は何パターンもあるのだ。

大切なのは結末ではない、

結末にたどり着くまでだと。

はるか遠くで誰かがそう言った。

…そうしてまた新たな未来が始まった。

実はすべては……

くりりエラ視点く

目が覚めると、いつもの部屋だった。

月明かりが差し込む部屋には私以外誰もいない

「ふわあああつ、朝夜かあ……」

今日、私はやけに長い夢を見ていた気がする

私はだれか自分ではない人間の行動を見ていた

いつもはいつでもいい夢だが今回は違った。

物凄く気になってしまう

「名前……なんていったかしら」

思い出そうとするとそれを遮るように霧がかかる

「顔……は？」

その子の顔は見る機会がなかったからまだいいとして

一番よく見ていたはずのその子の双子の子の顔すらわからない。

「なんだったかしら……ああ、そうだね、東洋のほうの顔立ちだったわね」

そつとベットから起き上がり、下に置いてある靴を履く

漆黒の翼を揺らして立ち上がり、音を立てず本棚に歩み寄る

私は壁際の本棚に並べられたうちの一番左の本を手取る。

それは、死んだお父様に文字を教わってからすぐに書き始めたもので、ちようど450年分くらいになる。

生まれてから40年後から一日も欠かさず1ページずつ書いていて、

これは確か……900冊目くらいだろうか。

これ以外899冊の日記は大図書館の一角に新しく設けた『日記スペース』に保管してある。私の分だけではなく、ルリアとお姉さまたちの分もあるから

900×4で3600さつくらいあるのではないだろうか。

「さて、記憶から消える前に書いてしまわないとね。

夢のはずなのになぜこんなに興味がわくのかしら？」

机に新しいページを開いた日記をおき、まだ寝起きであまり回っていない舌をフル回転させて呪文を唱える。

すると、私の周りには夢の中で見た画像が現れ、くるくると回転し始める。

一つ一つの画像が鮮明になるとそれは今度は、左上からじわじわと文字へと変わる。数分もするとすべての夢の画像……私は夢絵という……が文字に変わり、

その出来事を順番に組み立てていった。

そして、最後の呪文を唱える。

「私は記憶をここに記す」

すると、くるくるといまだ回転し続けていた文字は小さくまとまり、

日記にかざした私の手に集まり、日記に触れるとそのページにするすると入っていった

「ふう。さて、読むとしますか……の前に、着替えないと。」

クローゼットの中にあるいつもの服を着るとまた机に向かう。

その夢は、とても面白かった。

私たちが（というかお姉さまが）見下している人間のお話。

私たちと同じようにしゃべり、動き、笑う。

悲しんだりもして、くじけそうになる時もあった。

でも、圧倒的に違うのが、やはりその生活リズムと体だろう

私ももう結構長く生きているが、まだ見た目は人間の5歳児くらいだろう

人間たちは朝に起きて夜になると眠るが、私たちは逆。

「ああ、この人間のように生きてみたいものね」

もう完全に昇った月を見つめているとドアをノックして入ってきた。

「おはよ、ご飯食べに行こー」

ルリイはそのきれいな夜空のような透き通った青の髪を揺らしてこっちに来る。

「あ、もうそんな時間？ いいわ、いきましょ」

……あれはやはり夢なのだ。

私はどうあがいても人間にはなれないのだから。

道は何処へつながつているのだろうか

〈咲夜視点〉

今日はいつも通りの日になる、はずだった。

お嬢様が珍しく自ら掃除をされるとおっしゃって、

めつたに地下から出てこないフラン様もやってきて、

何かを話し合つた結果、何かに気付かれたようだった。

「咲夜、説明はあとでするからパチュリーのところまで行くわよ！」

しかも二人して揃っている。ここまで息びつたりな二人を久しぶりに見て、

私は凄く嬉しかったので大図書館まで付き添つていった。

すると、パチュリー様から物凄いことを聞いてしまった。

レミリアお嬢様と妹様に妹、しかも双子がいるらしいのだ。

もう300年ほど呪いでどこかに行つたまま。

呪いによってお嬢様たちの記憶も消され、捏造されていたが、

魔法防壁という10個までの干渉魔法を防ぐ魔法を自らにかけていたパチユリー様だけは記憶を消されなかったという。

今まで少しずつ、その双子の姉の方が残した記録を集めて調べていて、

ようやく呪いを消す方法が思いついたらいいのだ。

……でも正直、その方たちが帰ってくるのは嫌だ。

お嬢様はそのことで頭がいっぱいで、私にかまってくれないし、

いくら頑張っても心無い返事が返ってくるだけ。

きつとその方たちが帰ってきたら私は所詮、ただのメイド長。

私の存在なんて忘れてしまうんじゃないだろうか。

そう思うと物凄く怖くて、私はお嬢様にこういった。

「レミリアお嬢様、呪いを解くなんて。お嬢様にそんな危険なことさせられませんよ」
すると、こうかえってきた。

「咲夜、あなたにわからないのかしら。大好きな家族を失ったままなんていやよ。

それがまだ生きていて、私たちのところに戻せるかもしれないのに」

少し怒った口調でそう告げたレミリアお嬢様の横顔は、

決意をしたように真つすぐと月を見上げていた。

くフランドール視点く

私の心と頭の中でもややもやしていたものがなくなつたおかげで

少しだけだけど、能力、この忌み嫌われた能力を抑えることができるようになった。

目がそれにはないと思えば、つぶさなくても済む。

それで、双子の妹のことだけど、

片方の姉の方がリリエラ、妹の方がルリアというらしい。

一枚だけ『記憶絵』とよばれる、その見た景色を絵にして紙に記したものが残つていた

そこには黒に紺の混ざつたような色の髪の子と、

私、レミアアお姉さま、あと宇宙の様に果てしない感じがする青の髪の子。

黒っぽい方が姉、青っぽい方が妹。

ロングをそのままにしてるのが姉、ツインテールなのが妹。

大体覚えた。

あとはもうパチュリーに任せるしかない。

私は記憶干渉魔法系は苦手だからしょうがない。

くパチユリー視点く

私は知っていることすべてを話した。

というかすべて話したら1日かかった。

まあ、これからがきつと大事なんだ。

さあ、これも仕上げてしまわないと。

「パチユリー様、くれぐれも無理はしないでくださいね？」

こあはそういつて私の考えなど分かるかのようにほんの整理に戻っていった

「さ、私はできることをするだけでいい。」

やれることすべて、やってしまおうじゃないの？」

始まりを告げるのは貴女。

く 璃々視点く

目が覚めるともう5時だった。

「ふあ〜っ」

あくびをして起き上がり、まずは窓を開ける。

日が昇りきる前に、日課をしようかな。

部屋をでて、隣の部屋に入る。

その部屋には洗面台、シャワー室がある

まずは洗面器に水を流しいれて、洗顔する。

さっぱりして、目も覚めたら、次に部屋着に着替える。

それが終わったら次は昨日準備しておいたものを、

下の階にもって降りた。

さあ、ここからが本題！

まずは客室の隣にある空き部屋にヨガマットを敷いて、

その上に座る。

いろんなポーズをする。ねこがなんとかだとかいろいろ。

それを一通り終わらせると、ヨガマットを片付ける

次は剣道の竹刀を持って稽古部屋に行く。

準備運動はヨガでしてあるから飛ばす。

そして私は竹刀をふり続けた。

これは結構前に紫音に教えてもらったことで、

教えてほしいって言ったら

あの超絶クールな紫音が目をキラキラと輝かせたんだよなあ

これを20分くらいしたら、もう45分だった。

リビングへ移動すると、怜に頼んでおいた朝食が出来上がっていた。

私はさっと用意されていた朝食をとる。

今日は和食だった。きのこの炊き込みご飯とお味噌汁、お魚。

炊き込みご飯は私の好きなモノだから凄く嬉しい。

どのくらいかという、カラオケで100点取った時くらい。

まあ、とったことないけど。

「おはよお。ふあああつ」

「ん、瑠璃おはよ」

6時ごろになると、瑠璃が起きてきた。

着替えも終わらせているのに眠そうだ。

席に着くと、まず一言、こういった

「怜、私の分もお願ひするわ」

「かしこまりました」

怜が部屋から出ていくと瑠璃が正面に座る。

なにか不思議そうな顔をしていた

「璃々、玄関に今日の学校の持ち物置いたときに気付いたんだけどさ」

「なに？」

「どこかに行く気なの？」

「……うん。」

どうしよう、説明するべきだろうか。

私たちのことすべてを。

だが、瑠璃は一言、

「そう。」

とだけ言った。

「失礼いたします、お待たせいたしました。」

部屋に入ってきた怜が瑠璃の前に慣れた手つきで食事を並べていく

「ごゆっくりどうぞ。と言いましても45分ほどしかありませんが。」

「……………」

しばらくの沈黙。

食器と箸が当たる音だけが部屋に響く

それを破ったのは、二人同時にだった。

「あのさ。」

やばい、かぶった。物凄く気まずいんだが。

「あのさ。なにか、隠してるんでしょ？私に分からないとでも思ってるの？双子だよ、双子。わからないわけじゃないじゃん」

やっぱり、瑠璃は何も考えてないように見えて物凄く頭とカンがいい。

「いつていいんだよ。全部。一人で背負い込まないでよ」

その言葉に何故か懐かしさを感じる。

いつだっただろうか。昔のことだから思い出せないな

「うん、そうだね。言うよ、秘密にしていること全部。」

「うんっ！」

「でもね、その前にやることがあるはずだよ」

そういつて私は空になったお茶碗を持って立ち上がる

「え？」

「学校、行かないきや」

「あ……」

驚きを顔に表す瑠璃。絶対忘れてたでしょこの子

でもすぐにいつも通りの笑顔になった

「そうだね！さあ、今日は終業式！体育館寒そうだなあ」

「瑠璃、早く食べなよ？わたしは怜に車を頼んでおくからさ」
「うん、お願い！」

思うといつも瑠璃に助けられてばかりだ。
やっぱり、双子の絆は強いのもかもしれない。

こうして楽しいかもしれない一日がまた始まった。

嘘は積み重なって今に至る。

（瑠璃視点）

学校の校門の手前のロータリーで降ろしてもらうと、紫音と青空が並んで立っていた。気温は6度、こんなにも寒いというのにコートを脱いで制服の上着まで脱いでいる。

二人とも青くなっている。

「あ、おはよう、瑠璃、璃々。」

璃々はそんな二人の行動を疑問に思ったようだ。

「おはよ、何やってるの？」

「よくぞ聞いてくれた！今なあ……」

青空が待つてましたとばかりに話し出す。

それを遮るように、紫音が話し出した。

「今な！この寒い中で、どこまで耐えられるかっていうのをやってるんだ！」

「自分のとあるものを譲るといふ内容なんだ！邪魔するなよ！」

「どうやら二人とも寒さで頭をやられたらしい。」

「瑠璃、この二人、どうする?」

「璃々と二人で悩んでいると…」

「これは……皆様お揃いで」

「鏡夜くんが車から降りてこちらに向かってくる。」

「やあ、鏡夜、おはよう」

「鏡夜くんは二人を見ただけで何をやっているかを理解したらしい。」

「ふうん。じゃあまたあとで」

「そう言い残して校舎へと歩いていく。」

「瑠璃、ほんとにこの二人どうしよう。」

「二人は唇を真つ青にしながりにらみ合っている、が。」

「瑠璃が頭を抱えたのでそろそろ止めよう。」

「えつと確か、二人は効くんだけ……?」

「そつと近づいて、脇をくすぐる。」

「うおっ、なにするんだ璃々！」

「やっ、やめっ、くすぐるのはな、なしだ、ろっ！」

「どうやらこれは紫音の方が効くようだ、今度やってさしあげよう……と決めたところ
で、もう一人現れた。」

「あのーもしもし、青空通れないんだけどー？」

璃々が手をあげて、その人物にハイタッチする。

「おはよう、璃々、瑠璃。それと紫音も」

「え、俺は無し？」

「そう、青空に意地悪したがるのは祐奈である。」

「で、これは何を」

「えっと、簡潔に説明すると」

瑠璃が口を開く。

「が、私が遮る。」

「これはこの二人がこんなに寒いのに度胸比べをしているところです、

どうかだれかあの二人を何とかして……ってという状況。」

「ほう、それはそれは……」

「むう……」

まあ言いたいことはわかる。

あの二人はバカだ。

瑠璃には後で謝っておこう。

祐奈が次の声を発する前に、事は起こった。

「ちよ、ちよい、パ、ス……」

「つしやあ、紫音、俺の勝ちだなー」

紫音はふらりとバランスを崩し……

「紫音っ！」

何を思ったか、私は地面を思いつきり蹴る。

「届けッ！」

頭が地面に付くよりもっと早く、私は紫音を受け止める。

あ、もちろん抱きしめるみたいなアレじゃなくて、

後ろにまわって、かたを支えたただけだけど。

「ふ、ふう。間に合った」

「ね、ねえ璃々、あなた今何をしたの？」

「何って、人助け？」

「違う、そうじゃない、今ものすごい勢いで……」

祐奈が続きを言おうとすると、ちょうどチャイムが鳴った。

「あ、みんな、そろそろ行かないと、遅刻になるよ？」

いい感じに瑠璃が話をそらしてくれた。

「ほんとだ、璃々、紫音をよろしく」

青空がそう言うと、祐奈が青空を睨みながら、

「あんたも悪いんだから、一緒に運ばなきゃ」

と言うと、青空も素直に謝る

「あ、はい、すみませんでした」

でも、その会話が全くと言っていいほど頭に入ってこなかった。

今私は何をした？

何をしていたんだ？

まさか……

いや、そんなことがあるはずない。

だって、だって、『あの力』は封印されてるはずなのにどうしてあんなに早く動けた？

なんで、どうして、どうして、どうして……

まさか。

だれかがその封印を解いてしまったというのか？

「……り、り……り、璃々！」

瑠璃の声で意識が戻る。

「璃々大丈夫？今朝のことと関係あること？」

「ううん、だいじょうぶ、ちよつと……ちよつとだけ考え事をしてただけ、だから」
「ほう、関係あるんだね」

瑠璃にはわかってしまうものなのか……

「その人達！チャイムなりますよ！どうしたんですか」

外の見回りにでも行っていたんだらう先生がやってきた。

「はい、紫音……華月紫音さんが倒れそうになったので介抱してたんです」
意外にも青空が答えた。

「ああ、そう。同じクラスの人？」

今度は祐奈が答える。

「璃々です。支えてる方の人」

先生は少し悩むようなそぶりを見せた後、こう続けた。

「璃々さん、紫音君、は私に任せて。あなたは担任の先生に連絡してください」

いきなり先生に声をかけられて、正直びっくりした。

「あ、はいわかりました」

「璃々さんは先に行つていいわよ、最初からのいきさつを知っている

人は残つて頂戴。とりあえず校舎内に入りましょう。」

私は名指しでとつと行けと言われたのでしたがっておこう。

紫音大丈夫かな。

教室に入ると、いつものざわついた雰囲気だったが、

一部の女子がピリピリとした感じのオーラをまとわせていた。

たぶん二学期最後の朝に紫音が来ないことに苛立ちを感じているんだろう。

たぶん、とうにかぜつたいそうだ。

「おはよう、璃々ちゃん。今日は紫音くんと一緒にやないの？」

ましゆはどうやら私と紫音が一つのセットみたいに思っているんだろう。

まあ、毎朝大体一緒に時間に来るし、それもあながち間違っていないだろうけど。

「ましゆおはよ。紫音ならさつき倒れたから保健室かな」

「……えっ！……」

女子軍団が一斉にこっちを向いた。

「ねえ、紫音君倒れたってホント？」

まためんどくさいのがからんできたなあ……と思いながら、

適当に返しておく。

「そうだけど、何か？」

「はあ？」

なんかキレられた。

「璃々ちゃん！わざわざなんで煽るの〜っ」

うしろで縮こまったましゆがそう嘆く。
煽ったつもりはない。

「私は、紫音君が来てない理由を知りたいんだけど」

「それなら後で、紫音が来てから聞けばいいじゃない」

「ここはあえてお嬢様っぽい口調で攻めてみよう。」

どうせ口論なら少し立場を上に見せた方が強い。と思う

「うっ……で、でも、心配なの！なんで来てないのよ！」

ヒソヒソ

「あっ、やばいよこれ。」

「喧嘩かあ？」

「もう無理く璃々ちゃん止められないよ〜」

二度目のましゆの嘆き。

すまん、あとで購買でましゆのすきなキャラのペン買うから許しておくれ！と心の中で叫びつつ、追い打ちをかけるように話し始める。

「だから、後で聞けばいいじゃないの。私はまだ用意が出来てないし」

「さつきからあなたなんなのよ！紫音君のなんなのよ！」

そつちこそなに、と言いつ返し返そうとした瞬間。

後ろのドアが開いて、紫音が入ってきた。

「あ、紫音君！おはよう！」

口論なんてまるでなかったかのようには笑顔になる女子軍団。

紫音は自分の机に鞆を置いたが、席には着かずにこつちに向かってくる

「どうしてこんなに遅かったの？」

「今日の髪型もかっこいいね！」

周りには人の輪ができる。(女子の。)

「どうして遅かったか？」

紫音がめんどくさそうに言葉を投げかける。

「心配したんだよ！」

さつき言い合っていたのがなかったかのようにその女子は言葉を連ねる

「なんで……つて？話さなきゃダメなことなのか？」

「うん、気になるから教えてよ！」

紫音は少しめんどくさそうにため息をつく。

「ええ……なら言うけど」

私の目はその女子が机の陰で小さくガッツポーズしたのを見逃さなかった。

「俺は、校門近くで倒れたただけだけ」

「大丈夫？」

「怪我してないのかなあ？」

「保健室行つてたから遅かつたんだよ、きつと」

様々な言葉が飛び交う中、もう一度紫音が口を開く

「あと、もう一つ、璃々が俺の何かっていうやつ」

「え……聞いてたの？」

「廊下から丸聞こえだったぜ」

「ええ……」

なんか私の声も響いてたと思うとぞつとする。

もしかして他のクラスまで……なわけないか。

「璃々はなあ、俺の……」

「」「紫音の……（ゴクッ）」「」

「婚約者だよ！」

「「「「えーーーーーっつ!!!」」」」

クラス全員の大合唱。

え？なにそれ？

いきなり告白？

どうしようなんというか頭が痛い。

「普通に考えたら、嘘っぽくない？」

ついそんな言葉が出てしまった。

だって今紫音が首の後ろに手を置いてるじゃん！

だが逆に考えると、これはチャンスだ。

だって、嘘と捉えてもらえるんだから！

と思っていたのが間違いだった。

どうやら逆に信ぴょう性が増してしまったようだった。

「婚約者……ですって……?!」

あああああああああああ！

私は何をしてるんだあああああ！

この出来事のせいで、私は終業式中に意識を失い、
気が付いたら、保健室のベットのの上だった。

「璃々、大丈夫？」

瑠璃が心配そうな顔で、ベットわきの椅子に座っている。

「ん……大丈夫、生きてる」

「璃々、驚かせてごめん」

紫音もいたようだ。

保健室の先生がカーテンをめくって顔をのぞかせる。

「よかった、目が覚めたわね、あと三人くらい様子を覗きに来てたけど、

授業があるでしょって帰したわ。あとでちゃんと報告してちょうだいね」

「瑠璃、紫音、心配かけてごめん、驚きというかなんというか……」

「うん、あれはほんとに俺が悪いと思う」

「ねえ、二人とも何の話？」

「璃々と俺が「なんでもないわ、私のストレスよ」

そういうと紫音が少し寂しげな表情をする。

でも知っている、あの顔はわざとである。

「もう、璃々は昔から無理しすぎだよ、ほんとに」

「ごめん、今朝もこんな話、したよね」

「朝からいろいろありすぎだろ今日」

「青空と紫音のバカ騒ぎに私のクラスにまで聞こえてきた口喧嘩、璃々は倒れるし、もうめっちゃくちゃ。」

「そういえば。」

「今朝のあれ、何かを譲るとかはなんだったの？」

「ああ、あれ。あれは、まあ、うん。」

「超言葉濁すじゃん」

「簡単に言いますと、冬休みに……に遊びに行くのはどっちか、っていうのを」
「なんだ、それだけか。気にすることでもない……こともないか。」
でも、なんでそんなに恥ずかしそうにしてるのがわからない。

瑠璃の頭の上にクエスチョンマークが浮かぶ。

「どっ?」

「だから、……だってば」

「聞こえないよー」

「ああもう! その、二人の家だよ!」

「え、そんなことかけてたの?」

よし瑠璃、もつと言ってやれ!

「なんで? 二人で仲良くこればいいじゃん」

ダメだった、期待が外れた。

「瑠璃、忘れてない?」

「完全に忘れてるね」

「え、何を?」

そう、あの二人は……

「同時に二人の家に行けないんだよ。前、花瓶割ったから」

「あ……そんなのあつたねえ……」

そんな昔話とか、いろんな武勇伝を話していると、二時間目終了のチャイムが鳴った。

「あのさ、瑠璃、璃々を少し借りてもいい？」

紫音がそう言うと、瑠璃は笑顔で、

「いいよー」

と答える。私は物か。

ベットに固定されてて動けないから（抜け出そうとすると先生につかまります）私を置いて、瑠璃は保健室から出て行った。

「なあ、さつき、なんでストレスとか言ったんだ？」

一転して、紫音は真剣なまなざしになった。

「だって、変なことと言って誤解されたくないじゃない、嘘なのにさ」

「あ、嘘ってばれてた？」

「もちろん、だって、紫音は嘘ついた後、手を首の後ろに置くでしょ」

「え、マジで？」

彼の幼い時からの癖で、トランプでダウトとかやってもすぐにわかる。

「で、なんで婚約者、なんて嘘ついたの？」

「あー、なんか場の収集が付かなくなりそうだったから？」

「余計につかなくなったのは誰のせいでしたっけ」

「ごめんなさい俺です」

「まあ、倒れたのは私が悪いし。」

「それはお互い様だろ。だって、俺も倒れてたし」

「まあ、それもそうか」

しばらくの無言が続く。

時計の針の音だけが響く。

「なあ、璃々」

「ん？」

「お前、どこか遠くに行く気なのか？」

「なんのこと？」

瑠璃がどうやら喋ってしまったようだ。

意識を失ってたのはほんの数分なのに良く話せたな、と感心する。

「遠くに行く気なんだろ、瑠璃に聞いた。」

「瑠璃……許さない。で、遠くに行くのに問題でも？」

「いや、行くんだったら冬休みに遊びに行く賭けする必要なかったな、と思つて。」

悩みが小さかった、なんか紫音がいつもと違う気がする。

「紫音、なに考えてんの」

「え、あ、あの、なにも」

そうはいっているものの、手が首の後ろに置かれている。

「嘘つき。」

「……毎年毎年、遊んでたのに遊ぶなくなるのはさみしいな」と

「これも嘘。」

私が無言でいると、紫音が口を開いた。

「ごめん、嘘ついた。寂しいというか、もっと遊びたい、そう思った、それだけ」
「いくらでも遊べるでしょ」

……でも。

私も嘘をついている。

だって、あの計画がもし成功したら、もう二度と戻ってこれないと思うから。

「そうだな、はは、俺、なに变なこと言ってるんだろ」

「いつもの超絶クールな紫音様はどこ行ったのよ」

いつも、横からさりげなく助けてくれる、でもそれを表には見せない紫音。

誰にもわからない、彼の本心。

「え、俺そんな風に見える？」

「うん、無愛想なのになんであんなに女子があつまるんだろうなーって」

「ほめてくれたのか、けなしたのか、どっちかわからないな」

「どっちもです」

すこし紫音は考えるようなそぶりを見せ、こう続けた。

「怒り50だけど、嬉しさ60だから許す」

正直に言おう、こういう素直な紫音は、すこしずるいと思う。

「それって100にならないじゃん」

「残念、引き算ですー」

そして、予鈴のチャイムが鳴った。

クラスに戻ると、雑談していたらしい人たちがみんな見てきた。

ましゆが駆け寄ってきた、目には涙を浮かべている。

「もう！心配かけて！」

「ごめん、ましゆ。でも、そんなに心配しなくてもいいのに」

「友達の手配しない人間なんていないでしょ！」

「まあまあ、今日の帰りに購買によって行けばいい？」

「うん、許す。」

私は酷いやつだな。

ましゆにも、紫音にも。

私は嘘をついている。

でも、きつと。

私は言うことはできないんだろう

怖いから。

きつと。

「リリエラ、ルリア、待っててね」

遠いところの紅の館では、魔法使いとヴァンパイア二人が、とある戦いに挑んでいたとは知らず。

これから始めよう、私たちの物語を

〈璃々視点〉

学校から帰つてくると、いつも通りに怜が待つていた。

「お嬢様方、お帰りなさいませ。」

「ただいま、怜。」

怜はいつもただ静かにそこにいる。まあ、それが仕事なただけ。

「今日も疲れたねー。さ、璃々、朝の話の続きね!」

「お嬢様方、まずは制服を洗つてしまいたいと思うのですが。」

瑠璃は階段をのぼりながら怜の方を向いた。

「ありがとう怜!ちよつと待つててね!」

瑠璃が自分の部屋に入つていくと、怜は私の方を向いた。

「璃々お嬢様も制服を御願ひ致します。それと、どこかに出かけられるのですか?」

「うん。うん?」

どこからそんな話を聞いたのか。

「玄関から見えにくいところにお二人のポストンバックが置いてありましたので、

もしかしたら、と。」

「そう、なの」

やってしまった、完全じゃない。犯人私じゃないか。

「どこかに出かけられるのでしたら、お呼びください。私がお守りいたします」

「ううん、そうじゃないの。大丈夫だよ」

「そうですか…失礼いたしました。それでは。」

私は部屋に入ると、制服を脱いでベツトに投げ捨てる。

「やってしまったー。ああああああっ」

ベツトの上に飛び乗ってゴロゴロしていると、誰かがドアをノックした。

「瑠璃だよー」

「どうぞ、つて、ちよつと待って!」

投げ捨てた制服を椅子に掛けなおし、クローゼットから服を適当に選んで着る。

「ふう、いいよ」

瑠璃は入ってくると部屋の出窓に腰掛ける。

「心の準備はできてるよ! さあ、話してもらおうか?」

「何その王様みたいなキャラは」

「うーん、気分だよ気分。」

私も出窓のそばにあるソファ―に腰掛け、窓の外を見る。

「それじゃあ、話せることは話そうかな」

「……………話せないこともあるんだ」

「…はい。」

私はその後日が沈み、怜が食事の知らせをしに来るまでずっと話した。

今までのこと、これからやること。

長くなったけれど、たぶん、伝わったかな。

伝わってるといいな。

「璃々、そういうことだったんだね」

夕食が終わって部屋に戻る途中、瑠璃はそうつぶやいた

「うん、黙っててごめんね」

「でも、私には姉が三人も…」

「もういらないうって？」

「璃々よりは頼りになりそう」

「……………役に立たない子ですいませんねー」

「でも、やっとながった、かな」

「？」

「だって、時々知らないはずのことを知ってたりしたし」

「ああ、記憶が完全にブロックされてなかったんだよ」

「まあ、テストで役に立ったし」

知った後で、瑠璃はまたいつものように微笑んだ。

「これから、また、よろしくね璃々」

「うん。」

「それじゃあ、また明日」

「おやすみ。」

「うん、おやすみ」

部屋のドアを閉める。

明日は、きっと。

戻ってみせます、お姉さま方。

忘れることはできなくてもいい、進もう

く 璃々視点く

朝、目が覚めると、そこには見覚えのある顔があつた。

「おはよう、璃々。」

「うん、おはよう。紫音。」

……ん？

「っ、紫音っ!？」

「うん、そうだけど」

え？？どういう状況？これはどういうこと？

「あ、璃々おはよー」

「…瑠璃…?？」

「ん、なに？」

「お前かああああっ!」

布団をぱつとめくり、瑠璃に飛びつく。

「うわああああっ!」

瑠璃は叫んで、部屋の奥へ逃げる。アホか、部屋の奥に逃げても逃げ場なくなるだけでしょ！

いやそれよりも！

「なんで紫音が私の部屋にいるの!? 瑠璃が入れたんでしょ！」

瑠璃はムツとした表情になって、

「いや紫音に遊びに来ていいっていったのそっちでしょ！」

「あのーちよつとー?」

いきなり紫音が入ってきたことよって標的が目の前の相手から紫音へと変わる。

「もう！紫音は邪魔しないで！」

「…はい。」

だが瞬殺。弱い弱い。

「まずなんで起こさないのよ！」

「えーだつて起こさない方が面白いかなあつて……」

ごめん、瑠璃。それはないわ

「客が来てるのに寝てるなんて普通ありえないでしょ！」

「はい、璃々落ち着いて。瑠璃も下がって」

紫音が間に割って入った。

「まずな、璃々、起こさなくていいって言ったのは俺。だから瑠璃は悪くない」

紫音……

「そして瑠璃、勝手に連絡もなしに来たのは俺だ。だから璃々は悪くない」

つまりは、これは、

「紫音が悪いんだね」

「つ、ま、まあそういうことかな」

でも遊びに来ていいって言ったのは私だし、入れたのは瑠璃だから、この場にいる全員が悪いと思う。

「それよりも、何かしようぜ」

「あー、そのことなんだけど」

遊びたいのはやまやまなんだけど、ね。

「ごめん」紫音、今からやらなきゃいけないことがあるから、今日は帰ってもらっていい？」「？」

「瑠璃？」

え、瑠璃どうしたの、ほんとに瑠璃？偽物じゃないよね？

「どうしたの、璃々？早く着替えてね、やらなきゃいけないことがたくさんあるでしょ？」

「あ、うん、紫音ごめんね、そういうわけで」

「あ、ああ。わかった」

紫音を部屋から追い出して、パジャマから昨日準備しておいた、

紺色でポケット部分に白いネモフィラが刺繍されたレギンスと厚手のセーターを着て、コートを手取る。

二人は玄関にいた。

「遅くなってごめん」

見送りに行くのにわざわざ着替えの時間をもらったんだから、これくらいはしておくべきか。

「ううん、じゃ、行こうか」

広い庭の中を歩く。まったく、この家にはほとんど私と瑠璃と怜しくないのに、いい土地の無駄遣いだと思う。

紫音を門の向こうまで見送って、曲がり角の向こう側に消えたところで、瑠璃が口を開いた。

「璃々。あのさ」

「なに？」

瑠璃は、泣いていた。

「お別れ、ちゃんとできなかつたね…っ」

「そう、だね」

でも、これしかないんだ。

ごめんね、瑠璃。

私は瑠璃の手を握った。

瑠璃がひとしきり泣いて、泣き止んだころ。

太陽は、私たちの旅の始まりを照らすかのように。

く瑠璃視点く

「はあー」

ああ。またやっちゃった。ため息をついてしまった。

こんなことじゃいけないんだけどなあ。

瑠璃がいままでずっと大変な思いをしてきたのに、何もしてこなかった。

なのに、ため息しかつけないなんて。
きつとこれはバスのせいだ。

今まで金持ちの家に生まれて、というか別に生まれたわけじゃないんだけど、楽しんで育ってきたから、バスに揺られて変な気分になったんだ。

「いつも助けてもらって、それで何も返せない、か」

「ん？どうしたの瑠璃？」

隣でスマホ、地図とにらめっこしていたて璃々が顔をあげた。

「いや、別に」

「あ、まさか酔った？バス酔い？それともさっきの新幹線？」

いや酔ってないから。リバーズとかしないから。

だからその手荷物を私から遠ざけるのやめようね璃々。

まず家から新幹線の駅まで、電車とバスで一時間、そこから新幹線で一時間半、降りてすぐバス。

確かに酔ってもおかしくはないけど、うん。

「いやいや、違うって。でもちよつと疲れた」

「お茶飲む？はいお茶。あ、それよりほつといても疲れは癒えないから、今のうちに寝とく？」

「うん、そうする」

璃々からもらったお茶をのんでから、窓の外を見た。

さつきまで街の中を走っていたのに、もう住宅街へと移動している。

もう、まったく。璃々ったら。

ほんとのところ、私も璃々を手伝ったりとかしたいんだけど、今できることはほとんどない。

左手の時計はもう三時を指している。そういえばまだ昼ご飯を食べてない。

「お腹すかない…?」

璃々に聞いてみる。すると璃々はラップで包んだサンドイッチを渡してくれた。

「うーん、お腹はすくけど今食べると眠くなるし……」

璃々はまだ調べ物があるらしい。

まあそれでも、家を出る前に怜にばれたくないから、昨日のおやつだったサンドイッチを食べないでとっておいてくれた璃々に感謝かな。

バスの中には私たちと一番前の席のおじいさんだけで、静か。

「はあー」

またか。またなのか。このため息め、いつまで出てくる気だ。少し憂鬱な気分だ。

少し眠くなってきた。

ちよつとだけ、眠ろう、かな。

く璃々視点く

何とか家の裏門から抜け出して、かなり移動して、今はバスに揺られている。ちようど今さつき瑠璃が寝たみたいで、隣ですやすやと寝息を立てていた。

「お嬢ちゃん、どこに行くんだい？」

顔をあげると、おじいさんがいた。

「この山の上に行くこうと思つて」

「ほうほう、また珍しい」

そんなに珍しいのか？

「あの山はふもとの村、いや今は町だったかの、その者でも近寄らないんじや」

「なぜです？」

「『神隠し』とやらが起こつたりするらしいのじや」

「神隠し……」

これだ証明された。そこが幻想郷への道だ。

「まあ、そんなもの、ただのうわさにすぎん。気を付けていくんだね」

「ありがとうございます、あ、すいませんがおじいさんはその村の？」

「その次の小さな町じゃな。畑で木と仲良くしておる」

「へえー、あ、もうすぐ着くみたいですね」

バス内に「次は……」というアナウンスが入った。

手すりについたボタンを押し、瑠璃を起こす。

バスが止まったのは小さなバス停だった。

降り際におじいさんに声をかけておこう、と思つて振り向く。

「気を付けてな」

「はい、ありがとうございます、楽しかったです」

バスはドアをスライドさせて、去っていった。

振り返ると雪が降っていた。

「ねえ璃々、この山であつてるの？」

「うんそうだけど？」

「何処から登る？こんな雪だと大変だけど」

辺り一面真っ白で、入口、と書いた看板の先も例外ではなく真っ白だった。

「ま、何とかなる！」

ボストンバックからジャンパーと長靴を出して履き替える。
瑠璃もジャンパーと長靴を装備して、準備はできていた。
さあ、今からやろう！始まりだ！

見えない太陽は、きつと、雲の上で……

「旅は道連れ世は情け」かもしれない。

↳ 紫音視点

知っている。

もう会えないことなんて。

でも、これだけは言いたかったな、なあ璃々。

いつも笑ってるわけじゃないし、別に俺だけに仲良くしてるわけじゃない。

優しいわけでも、かわいいから、とかでもない。

それでも、少し寂しそうな璃々の顔、それだけはさせたくなかった。

だって、俺……俺、

「璃々が大好きだったんだもんな」

言わなくてもわかるなんて、そんなのないよって、言ったのは璃々だったのに

「隠し事は無し」って約束、今でも覚えてるんだ。

「約束、守れなくて、ごめん、っ」

いつも弱くて情けなくて、それを必死になって隠して埋めて。

なによりも誰よりも、璃々に振り向いてほしかったんだ。

く璃々視点く

「うわあああああ？」

「え？なにになに？」

「足！足埋まった！」

そう、ただいま絶賛雪の中！うん、寒い！冷たい！

久しぶりの雪で私も瑠璃もはしゃいでいたけど、それどころじゃないはず。

バス停で装備を変えてから、二人で手を取りながらかなりの距離を進んできて、

もう一時間以上たったけど、実際まだ神社にすらたどり着けてない。

「うひゃーっ！ぬけたあ！」

しかも瑠璃の足がよくはまるしで今どこかわからん！

「はい、瑠璃、36回目！更新！おめでとうっ！」

手を引つ張つて瑠璃を抜いて、歩いて、これをもう36回。

「えへへ、ありがとー。それにしてもっ、ここ、どこ？」

「瑠璃があちこちではまって歩いてるから戻るときはわかるけど、どこだかわかんない」

「えっ、それってやばいんじゃない」

そんな軽口を叩きあっていると

ふっと悪寒が走る。

「瑠璃っ、そこから離れてっ！」

「え？なにになに？」

そこにいきなり、女の人が現れる。

「あら、気づかれちゃったかしら」

金髪で、紫の目をした少女、としか言えない人が立っていた。

でも、雰囲気は少女じゃなかった。

「うわっ、誰この美人さん!？」

瑠璃がオーバーリアクションなのはいつものことだ。

でも、ほんとに美人さんなのだ。

「あら、嬉しい。あなたはもうらい」

「瑠璃っ！」

その人の横にいきなり空間が裂けるように現れた禍々しいナニカは振り向こうとした瑠璃を呑み込む。

「瑠璃をつ、返せ！」

「あらあら、乱暴な子は嫌いじゃないけど足りてるのしょうがないけど、アレを使うか、な。」

目を閉じて祈る。

おねがい、一回だけでいいから！

「ナニヲ、ノゾムノ？」

自分の頭の中に自分の声が響く。

璃々、いや、リリエラ、思い出せ。あの時と同じ！

『形・物事を操る程度の能力』。少しでも瑠璃に近づくための手。

「あらっ？」

目を開くと、別世界だった。

前のように赤銀に包まれたりしなかったけど、これは。たくさんのタブの中に、その人を見つける。

「あつた。項目8、能力。3の一時使用停止。」

「あなた、何を？」

「ちよつとしたことだよ」

使用一時停止したさっきの裂け目は瑠璃を吐き出す。

「ったー、あれ、生きてる」

「何勝手に死んだつもりになってるの」

「え、だって真っ暗だし、死んだかと思った」

そんな話をしていると、さっきの人が笑った。

「うふふ、素敵なモノを見つけたわ、二人とも、来てちょうだい」

「はーい」

瑠璃は素直についていく。

「瑠璃ちよつと！なんで素直についていこうとするの!？」

瑠璃は立ち止まって私の方を振り向く。

「だってこの人、というか妖怪さんは璃々が行こうとしてる、『幻想郷』とかの管理者の

一人なんだって」

「は?」

やばい、完全に思考が止まった。え?」

「うふふ、初めまして、八雲紫よ。瑠璃さんが言う通り、幻想郷の管理者、神隠しの主犯。

紫でいいわ。よろしくね」

「あ、暁璃々、ちよつと不思議な力が使えるだけの普通の人間です」

まあ、今は、 فقط。

「暁瑠璃、私は特に何もできない人間かな」

「そう、それならよろしく。」

その人、いや、紫さんはにこつと笑い、私の方を向く。

「これ、解いてもらえると嬉しいんだけど」

「あ、すいません、今やります」

もう一度紫さんのタブを開く。8の能力から7、規制解除を選ぶ。

「ありがとう、それじゃあ、お二人ともこっちに」

紫さんの隣の裂け目に入る、と。

「うわあああああつ」

目の前に、物凄い風景が広がっていた。

自然の豊かなところだった。

「どう？素敵でしょ？」

「うん、綺麗。」

目の前に広がる風景は、今まで行ったどんな絶景よりも神秘的だった。

「でも、ここは綺麗だけじゃないの。いろいろあるの。いろいろ、ね」

瑠璃が私の手を握る。

「さあ、あなたたちにまずは、ようこそ、幻想郷へ。」

「どうも、よろしく」

「一番大事なルールを説明しなくてはいけないわね。ちょうどいいところがあったわ」

左下の方の神社を指さす。そして、またスキマに入れられる、と

「うふふ、霊夢、こんにちは」

「なつ、紫！また変なところから…」

確かに、特に何も無い空間に裂け目を作って、いきなり出てきたら変なところから出てきたと思うだろう。

「ちよつとスペルカードルールについて教えてほしいのがあるのよ」

「私じゃなくてもいいじゃない、紫が説明すれば。だってルール作成者だし」

「あら、霊夢、説明できないのね。なら私が…」

「だれも出来ないなんて言っていないわ。」

「それじゃあ、霊夢よろしく」

紫はまた裂け目へと消えた。

それで、置いて行かれた。

「はあ、まあいいわ、その前に。博麗霊夢、妖怪退治が本業よ、よろしく。博麗の巫女なり霊夢なり好きに呼ぶといいわ」

「霊夢さん、ですね、暁璃々です。こっちは双子の妹の瑠璃。よろしくお願いします」
「よろしくお願いします」

霊夢さん、と呼んだことが気に入ったのか、少し微笑んで続ける。

「そう。じゃあ説明するわ。スペルカードルールの下での決闘ではまず、その美しさに意味があるの。だから、意味のない攻撃をしてはいけないし、このスペルカード以外で攻撃することも許されない。決闘の前には使用回数を宣言しなきゃいけない。まあ、ルールはそんな感じね」

「ほうほうそれで？」

「それで、つて、それだけよ。」

「いやこのルールができた理由とか」

「ああ、それなら、妖怪同士の決闘がこの小さな幻想郷の崩壊につながる恐れがあるけど、決闘のない生活は妖怪の力を失う原因になりえるからつてことと、人間と妖怪が互角に渡り合えるようにすることね」

「ふうん、それで？どうやって作るの？」

瑠璃もようやく理解できてきたみたいで、続きを求める。

「自分の力よ、そんなもの。スペルと紙カード自体には力はないわ。」

「へえ、それは魔法とか？」

「そうね、方法としてはそんな感じ」

大体は理解できた。それじゃあ。

「ありがとうございます。あと一つだけいいですか」

「なにか？」

「この幻想郷の中に、ヴァンパイア、はいますか」

「…いるわ。一番じゃないけどかなり厄介な相手。というかめんどくさい。特にそのメイドが」

そのメイド？美鈴かな

「そのヴァンパイアに会いに来たんです。館の場所と方向を教えてくださいませんか」

「お願いします！璃々はそのためにここにきたんです！」

「え？会いに来たの？興味がある、とかじゃ入ることはできないはずよ」

「興味とか以上の関係があるんです！」

瑠璃が必死になっている。瑠璃そこまでしなくても…

「あら、それなら」

紫さんがまたどこからともなく現れる。

「一緒に行きましょうか。用事もあることですし」

「紫っ、人間がそんなところにいくのはダメよ」

「何故かしら」

「それは！あいつ等は人間に興味ないはずだし……もういいわ、なんでもない」
霊夢さんは紫さんに対抗することをやめた。
私としては嬉しいんだけど。

「それじゃあ、璃々と瑠璃、いくわよ」

「うん。」

また裂け目に入る。

そして見覚えのあるあの紅い館が見えた。

「紫さんのその裂け目、便利ですね」

「裂け目……？ああ、スキマのことね」

「スキマっていうんだ、へえー」

瑠璃が感心しながらスキマから出てきた。

「行きましょう、門番は寝てるはずだから起こさないで行くわよ」

そう言われて大きな門の前に立つと。

そこには門番なんていなかった。

「あら、今日はいないのね」

紫さんは門を開いて入って行く。

あれ、スキマ使わないんだ。

「ひろっ！」

瑠璃が驚いている。まあ、今まで住んでいた館の庭も十分大きかったけど、紅魔館はそれ以上だ。

そういえば、今もその呼び方なのか？

誰にも会わずに館の玄関ホールへ入る。昔と何も変わってなかった。

涙がこぼれた。

瑠璃も立ち止まった。

「ねえ、璃々。私、ここを知ってる」

「うん、瑠璃。」

「あら二人とも、どうしたの？ かわいいお顔が台無しよ？」

「嬉しかったんです。」

「またスキマ妖怪か。今日は何の用ですか」

数秒前にはそこに人なんていなかった、でも今は。

玄関ホール階段上に、銀髪のメイドらしき人が立っていた……

辿り着いた先には次の壁が立ちはだかるんだろう

（咲夜視点）

お嬢様とフラン様が妹たちがいると気付いてもう半月がたち、

パチユリー様が術者のしつぽをつかめそうな今日この頃。

あれからお嬢様は、今まで何もしてない、何もできてないと言って、毎日昔の高く積み上げられたままの資料の山に埋まり、その妹たちのことを探すカギを探していた。

いくつかの断片的な情報を見つけてはパチユリー様のところへ持つていく、それが今の私に与えられた仕事。

他の仕事の合間を縫ってお嬢様のところへ行つて、お嬢様の好きな紅茶を淹れて。

ああ、帰ってくるなら早く帰つてこればいいのに。

ここ数日の考えはずっとそんな感じだった。

そして、今日。ただでさえ忙しいお嬢様にまたあの妖怪がやってきた。

胡散臭さではたぶん幻想郷一、あのスキマ妖怪だ。

しかも二人も人間を引き連れている。ここで働かせろ、とかいう話だろうか。

玄関ホールへ向かうと、その人間の少女は笑いながら泣いていた。

「あら二人とも、どうしたの？かわいいお顔が台無しよ？」
「嬉しかったんです。」

なんなんだろう。もやもやする。嬉しいことなんて、私にはほとんどないのに。
お嬢様にお仕えして、話をして。それだけが、私の、今の私の幸せで。

なのに、それなのに、妹たちは……

「またスキマ妖怪か。今日は何の用ですか」

そんな言葉が零れる。

少女たちとスキマ妖怪は私に気付いて、少女たちが驚く。

「ちよつとお話したいことがあるのよ。あなたのご主人さまに。」

またか。この前はスペルカードルールを導入しろ、で、今日は何。

「今お嬢様はお忙しいのです。あとにしていただけないでしょうか」

「いいえ、今しかできないわ。」

しょうがない。お嬢様をお呼びしよう。

「分かりました、こちらへ。」

応接間に通し、お嬢様のもとへ行く。

「失礼します、お嬢様」

「なにかしら、咲夜。」

「お客様です。スキマ妖怪と人間の少女二人です」

「八雲紫、また来たのね。それより、人間の少女って？」

「はい、またですね。そちらの方は知らない方です」

「知らない？ふうん、誰かしら。まあいいわ。行きましょう」

「はい、お供します」

お嬢様の後ろについて歩き、ドアを開けるときは先に前に。

「お連れしました。ごゆっくりどうぞ。」

紅茶を出し、私は部屋の外に出る。

はあ、またやってしまった。

もしかしたらお嬢様に感じ悪く映ったかもしれない。

「ええええええええ？何ですって!？」

5分くらいしてから、悲鳴…のような声が部屋の中から聞こえ、とつさにドアを開ける。

「どうされました?!」

お嬢様は数秒口をパクパクとさせた後、私の方を向いて言う。

「フランとパチエ、あとパチエのところにいる美鈴を連れてきなさい！大至急よ！」

「はい、わかりました！」

大至急と言われたのだから許してもらおう。時止めを使い、大図書館へ向かい、ドアの前で時止めを解除する。

「失礼いたします！パチュリー様！」

「あら、咲夜。どうしたの？」

「お嬢様がお呼びです、美鈴も、後フラン様は？」

「ここだよ、咲夜」

フラン様が後ろから私の背中をつついた。

「ひゃつ、また後ろに！もう、フラン様」

「えへへ、咲夜面白いんだもん」

「それより、皆さん、来てください！」

急いで応接間へ戻ると、少女二人の手を取るお嬢様がいた。

「連れてきました、お嬢様！」

ちよつと、何でお嬢様の手を。いや、それよりも。

「誰ですか、その方たちは」

「ありがとう、咲夜。パチエにフラン、美鈴もいるわね」

「うん、どうしたのお姉さま」

フラン様が、みんなが一番気になっていることを尋ねる。

「妹よ、フラン！私と、あなたの！」

「え、ほんと？それじゃあ、この二人が？」

「ええ、そうね、その通りだわ。右側の少女からは微細だけどリリイと同じ魔力が感じられる」

パチュリー様までそんなことを言っている。

「あの、まだ私は……」

「あ、ええ、そうだったわね、話の続きね！」

「はい、みんな来てくれたようですので説明します、今の私は暁璃々、こっちは瑠璃です」

「うん、それで？」

レミリアお嬢様が嬉しそうに続きを聞いた。

「それと同時に、リリエラ・スカーレットでもあります。姿、魔力、あと翼と一部の記憶を封印されているので、本当にリリエラであるかはよくわかりません。瑠璃……ルリアの場合は記憶は完全に封印されています」

「ええ、ある程度は知っているわ」

今度は。パチュリー様。

「まだ完全なリリエラではないですが、レミリアお姉さま。フラン姉さま。」

「な、何かしら」「なーに？」

「ただいま、帰りました」

少女：璃々、もといリリエラは一筋の涙をこぼす。
そんな中、彼女の前に進み出たのは。

「おかえり、リリエ」

パチユリー様だった。

「憶えてるの、パチエ？」

「うん、憶えてる。忘れてないよ」

え、パチユリー様？

いつもと口調が違った。

「やつと、ここまで来たよ」

「約束、覚えててくれてる？」

「魔術の研究、でしょ？今からでも遅くないよ」

「うん、330年の間の努力を見せてあげるからね」

そして見つめあい。

「ただいま、パチエ」

「おかえり、リリエ」

二人は抱きしめあい、そして笑った。

すると、お嬢様たちが。

「ちよつと、パチエズるいわよ！私も私も！」

「お姉さま！それを言うならお姉さまだつてずるいわ！」

お嬢様とフラン様がパチュリー様を引きはがして少女の手をとる。

「おかえり、リリイ。」

そして、少女たちはようやく我が家に辿り着いた。

月はまだ登りきらない、夕方のことだった……

それでも、まだ、戦いは続くのだろう。

探しものは何処に

誰でも救いを求めているならば 前編

く璃々視点く

静かにページをめくる。

人間の寿命より長く存在するある吸血鬼の少女の日記。

それは確かにそこに『リリエラ・スカーレット』が存在した証であり、
彼女が残していった記憶だった。

でも、忘れてはいけない。

まだ私は『暁璃々』であり、『リリエラ・スカーレット』ではない、ということ。

「ねえ、璃々、それ、面白いの?」

「もう、邪魔しないでよ瑠璃。」

ここは紅魔館の中の大図書館。

記憶にある図書館よりもずっと広く、かなり本が増えていた。

でも、パチエが残しておいてくれたのか、私がか所に集めておいたスカーレット家の歴史とかの本は昔のままだった。

そこにあつた リリエラ・スカレット 私 の日記。

それは今の私が術式に邪魔されてわからなくなった記憶がつづられている。

「だってさー読めないんだもんコレ。こんなん読めないって」

「なんで？読めるでしょ」

「無理！これ何処の言葉？逆になんで読めるの！」

そうだ、今までずっと日本語に囲まれてたからすっかり忘れてた。

私は基本どんな言語でも読めるんだった。

「そういう能力的な？まあ、役に立つのはこういう時だけなんだけど」

手にした日記を瑠璃に見せる。

「うへえ、なにこれ」

「これが、きよ。そんで次が、う。これは、は、だよ」

「もうそれ表にしておいてよ、じゃないと読めない」

まあ、それも時間があつたら。

「それより、おやつにしようよ！レミリアさんが呼んでるよ」

「レミリアさん、じゃなくてレミリア姉さま」

「あ、うん、それ、そのお姉さまが呼んでる」

日記にしおりを挟み、立ちあがり伸びをする。

「つはあ、うん、いこう瑠璃」

そう、この子はまだ記憶が戻らない。

だから、早く術式を解く方法を探さないと。

「パチエ、この本ここに置いたまま行くけど、後で戻ってくる」
どこからか声が返ってくる。

「ええ、分かった、いつてらっしやい」

きつとまた本の山に埋もれているんだろう。

まったく、不健康なのはいつまでたってもかわらないらしい。

もう、この館に帰ってきて一週間。

でも、まだ。

私は、なにができる？

なにをするために戻ってきた？

今はまだ、それすらも。

私には、分からないんだ。

くフランドール視点く

かわいい妹たちが帰ってきて早一週間が過ぎた。

でも、私はこの地下からは出ない。それは何故か。

「寂しくなくても、怖いもの。」

ただ一人の牢屋。

「もう、誰も。」

内側からしか開けられない鍵。

「私なんか、私みたいなバケモノが。」

長い月日で心の扉は閉ざされていて。

「傷つけたく、ないもの。」

本当は、分かっている。

「あの子は、リリエラじゃない」

でも、言っではいけない。

「だから、壊しても…いい、わけないよ」

まだ、心が痛い。

「リリエラ、帰ってきてよ。あんな風には笑わないはずだよ」

ナニカが、心を蝕んでいく。

『そうだよ、あんな風に笑う子じゃないよ』

またやってきてしまった。私の、悪魔。

「いらつしやい、×。」

『あの子は偽物。僕が本物につながる鍵を持つてる』

私が、見つけてしまった『吸血鬼の家系図に載せられない忌み子』は。

「いつになったら、その鍵をくれるの?」

今日もまた、私を唾うように。

『君がその体をくれたら、鍵をあげるよ』

「それだと、多分無理ね」

『だろうね、でも僕は待つからね』

「そう」

体をソファアに預け、天井を見上げる。

天井は数百年の月日経っても、かわらないまま、なのに。

「私は変わっていつちやうんだもの」

仕方のない、こと、よ、ね。ねえ、リリイ?

そして私は、うとうとと微睡んだ

〈咲夜視点〉

お嬢様はあの妹たちが帰ってきてからずっと上機嫌だ。でも、私はその逆だった。

もう、嫌だった。

礼儀正しく、まっすぐ前を見ている。

素直で相手を思いやれる。

妹たちはお嬢様の妹にふさわしいと言える。

でも、私は違う。

今まで、お嬢様に拾われるまでは一人だった。

優しさなんて、生きるのに必要なかった。

素直でいたらこの世界で生きるのは不可能だった。

相手のことなんて考えているほど余裕なんてなかった。

だから、だから、私は。

あの子たちが許せない。

お嬢様、ごめんなさい。

こんな醜い私で。

「ねえ、咲夜」

「なんでしようか」

「もうすぐリリイとルリイが来るわ、おやつ、作ってくれてるでしょ?」

「ええ、もちろんです」

「出してきてちょうだい、私は」

「ええ、分かっております。紅茶ですよね」

「流石咲夜。よろしく頼むわ」

お嬢様はテラスに出て眩しい太陽を見上げている。

廊下の向こう側から楽しそうな笑い声が聞こえてくる気がする。

声の聞こえる方と逆に、私は歩き出した。

誰でも救いを求めているならば 後編

（瑠璃視点）

静かな夜。庭の真ん中には月光が降り注ぐ。

ここは紅魔館の庭。世話がきちんとされているようで、どの花もきれいに咲きほこっている。

「璃々は、大丈夫かなあ」

ここにきて一週間。毎日のように自分の日記とやらを読み漁り、一日のうち半分は大図書館に引きこもっている。

あの運動好きの璃々らしくないな。

独り言。だったはずだった。

「リリエラお嬢様ならきつと。大丈夫ですよ、ルリアお嬢様」

斜め後ろには、あの赤髪の人：妖怪の美鈴さんがじょうろを持って立っていた。

「あ、美鈴さん。こんばんは」

「やめてください、美鈴でいいです」

でも、この私は本来の私を知らない。
瑠璃
ルリア・スカレット

だから、この妖怪さんと過ごしたであろう時間も、私には、「どうしたんですか、そんな暗い顔して。」

じょうろを花壇の隅に置いて、美鈴さんは私の隣に座る。

「美鈴さ、美鈴も知ってるとは思いますが、私は、今の私は…」

「知っています。記憶が、ないんですよね。」

「すいません、だから」

だから、私はルリアじゃない。そう言おうとした。

「それじゃあ、私の知ってるルリアお嬢様について、話しましょうか」

「お願いします」

また少しネガティブな考えになっちゃったな、と思いながら話を聞く。

「この花壇、最初はこの目の前のレンガのところだけだったんですよ、

最初の花壇を作ったのはルリアお嬢様です。お嬢様に教わって私が増やしていくうちに気付いたらこんなに大きくなって。」

「へえ、それで？」

「ついこの間まで、なぜかわからないけどここだけは続けなきゃ、って思ってたんです」「うん」

「お嬢様たちが戻ってきてきて、分かったんです。レミリアお嬢様の話を聞いて、気付いたん

です」

「何を？」

「この花壇は、この花畑は、ルリアお嬢様に見せたくて続けてたんだ、って」

言葉が出なかった。この人は一人で、何百年も。

ただルリアだけを待って。

でも。

「私は、ルリアじゃありません。だから、いつか、ルリアが戻ってきたら、ルリアに見せてあげてください」

「いいえ、こうしてあなたが見てるじゃないですか」

「え？」

「ルリアお嬢様じゃなくても、あなたが。それでいいんです」

「なんで、ですか？」

「ちよつと恥ずかしいですけど、見てほしかったから。咲夜さんが来て、私が門番になった頃から、私はいつもただ一人でこうしてきました。その前からずっとこうだったのかもしれない。でも、本当は誰かに見ていてもらいたかった」

美鈴さんは笑っていた。

うれしそうに、私がこの光景を見ていることを喜ぶように。

「だから、今、あなたが見てくれて、嬉しいんです」

何故か少し、私もうれしくなった。

「ねえ、美鈴。今の私は花の名前とか、育て方とか、全然知らないの」

「ええ。」

「だから、教えてくれる？」

美鈴さんはちよつと驚いたような表情になって、それから、今まで見た中で一番の笑顔になった。

「はい、もちろんですー！」

美鈴さんは嬉しそうに私の手を取り、ひいた。

次の日の朝、目が覚めてから思った。

…そういうえば、結局ルリアってどんな子だったんだろう。

くパチユリー視点く

ある晴れた日の朝。私は目を覚ました。

…本の山の中で。

「ふあああつ、むきゅつ！」

伸びをした勢いで支えになっていた本を動かしてしまい、上から本が落ちてきた。数百ページの重みがいっものナイトキャップを被つてない頭へ直撃。

これだからこあがいるのに。あの子いっつもどこかに行つちやうんだから。

「おつ、ここから声がしたぞー」

「あら、まさかこの中に？」

魔理沙とアリスの声がする。そういえばこの前の実験の続きをする約束だったつけ。

でも今日はリリエラ：璃々と日記のほかに残されていたメモをいっしょに整理しようと言つたような…。

ぎいいいっ

重い大図書館のドアが開かれる。

「おはようパチエ、起きてる？」

璃々の声がする。（この前「まだ私は完全なリリエラじゃないから璃々って呼んで！」って言われてからそう呼んでいる）

「誰だっ！」「誰っ!？」

「え、どなたですか？」

そりやそうなるか。とりあえずここから脱出しないと…

「おはよう璃々。魔理沙とアリスも、ここから出たいんだけど、手伝つてくれる？」

「分かったぜ」

上の方から順番に本がどかされていく。

ある程度取り除かれて、私は外に出ることができた。

「改めて、おはようパチュリー」

「おはようだぜ、なんであんな山の中にいたんだ？」

「えっと、調べものしてたら寝ちやつたみたいで……」

「もう、パチエって昔からドジよね」

「それを璃々に言われるとどうしようもないわね」

魔理沙が指をパチンと鳴らす。

「そうだぜ！パチュリー！誰だよこの子！」

「そうよ、私もそれが気になる」

魔理沙もアリスも初めて会うからしようがないけど、まあそういう反応になるよね。

「この子は、えっと」

「私は暁璃々、パチエの研究仲間みたいな感じですよ。ついこの間ここに来たばかりなの」

璃々が先に言ってくれた。この間来たばかりも嘘じゃないからよし。

「そうか、えっと、璃々、よろしくな！」

魔理沙はいつも通りに明るいままだったが。

「え、人間よね、あなた。魔力があまり感じられないんだけど。」

アリスは鬼のようだった。怖い。

「えっと、いろいろあつて魔力とか封じられちゃつてて、魔法とかは使えないかな、つて感じで」

「あら、そうだったの、ごめんなさい」

なんか解決したようだ。

「あの、あなたたちは？」

璃々も知らないんだつた、忘れてた。

「私は霧雨魔理沙、この通り、普通の魔法使いだけ。そこでこっちはアリス・マーガトロイド。自称都会の人形使い。」

「自称じゃないわ」

「自称だけ」

「魔理沙？」

「…自称じゃないぜ」

今日の前で魔理沙が脅されてるように見えただけ。ほんとアリス怖い。

「私は紅茶でも準備するから、適当に座っておいて」

「え、パチエ、手伝おうか？」

「ううん、大丈夫だから、ね？」

「もう。ありがとう」

私が紅茶を淹れて戻つてくると、どうやら話はずんでいるようだ。

「へえ、璃々は風系統が得意なのね、意外だわ」

「今はほとんど何もできないですけど。まあ封印解けたらお見せします」

「璃々、敬語じゃなくていいぜ」

「でもお二人とも私より年上だし…」

「幻想郷で年なんて気にしてたら負けだぜ」

「そうよ、レミィだって見た目6，7歳なのに五百歳超えてるじゃない」

私も会話に加わる。

「それは、まあ、そうですね」

璃々は少し困ったような表情になった後、私に助けを求めるような目で見てくる。

いやそう思わせたの私なんだけど。

「はい、紅茶よ」

「ありがとうパチエ」

「ありがとうだぜ」

「いつもありがとうパチュリー」

「んで、何だっけ？」

魔理沙は意外と忘れっぽいのを忘れていた。

「璃々の敬語を直す件」

アリスは簡潔にまとめすぎてて分かりづらい。

「ああ、そうだったな」

「え、じゃあ普通に敬語なしで…？」

「そうだな、そういうことだ」

「ちよつとやってみてよ璃々」

「えつと、よろしく…？」

「うん、まだ固いが一応合格だな」

アリスがうんうん、とうなずく。

「それじゃあ、四人で実験しませ、しようよ」

璃々はどうかやら約束のことを聞いたらしい。

「それはいいな！でも、璃々できるのか？」

「調合とか魔法陣描くくらいなら魔力なしでもできま、できるよ」

璃々が敬語交じりになってきた。やっぱりだめだったみたい。

「なんかすつごく喋りずらそうなんだけど」

アリスの鋭いツツコミ。

「うん、喋りずらいけどしようがないかなって」

あ、戻った。

「それじゃ、実験の準備してくるから、三人は片付けお願いね」
飲み終えたティーカップを置き立ち上がる。

「うん」「分かったぜ」「よろしく」

異口同音に返事が返ってくる。

どうやら今日は楽しくなりそうだ。

レミリア視点

妹たちが帰ってきて一週間がたった。

毎日が、楽しかった。

一人じゃない食卓。

寂しさなんてもう感じない。

でも、このところ咲夜の様子がおかしい。

ちよっとイライラしているようにも見える。

ちよっと、頑張らせすぎたかしら。

今までは私とフランだけでよかったのに、倍の人数になったのだから当然か。

「今夜は別に、月は紅くないのよね」

「お嬢様、どうかされました？」

咲夜が物陰からすつと現れる。

「いいえ、でも、あなたの紅茶が飲みたいわ。毒入り以外でね」

「はい、かしこまりました」

すつと消えていった咲夜は、やっぱりどこか寂しそうだ。

ここままでよくわからない咲夜も久しぶりだ、と気づいて少し微笑み、月を見上げる。

咲夜、どうか、わかってね

これが、あなたが幸せになる第一歩だということ。

今だけでも、同年代の少女同士でお友達になつて。

貴方の自由はもともと保証されているのに。

「お嬢様、お持ちいたしました。こちら、ダーズリンティーでございます」

「ありがとうございます、咲夜。ところで、あの二人はどこに？」

「リリエラ様はまだパチュリー様たちと研究してらっしゃいます。魔理沙とアリスも。

ルリア様は、庭の真ん中のところでしょう。」

「そう。あなたはどこか行きたいところはある？」

「え、私ですか？」

とても驚いた顔をする。休みくらい貰ってくれないと困るのだけど。

めーりんも咲夜ほどではないけどメイド業はできるから、そっちに任せればいいし。

「いいえ、特には。あ、ですが……」

「何か欲しいものでもいいわよ」

「じゃあ、新しいナイフを御願いしてもいいですか？」

「もちろん。25本あれば足りるの？」

「はい、ありがとうございます！」

急に花が咲くような、そんな笑顔になった咲夜の後ろ姿は数分前とは違う。

足取りも軽く、廊下の向こうへと歩いていく。

「まったく、つらいなら言えばいいのに。頼ってばかりは嫌なのだけど。」

私も立ち上がり、自室に向かう。

おやすみ、今日。

月明かりはテラスと、庭と、大図書館と。

全てを平等に、優しく包み込んでいた。

望めば望むほど、願えば願うほど。

（璃々視点）

一月一日。今日は元日、幻想郷life八日目の朝。

昔のままだった部屋を掃除してもらって、久々の自分の部屋だったけど、まあまあ慣れてきた。

昨日はここにきて初めて友達、というか研究仲間ができて、その二人とパチエと話しあったりした。魔理沙は見た目通り、アリスは見た目よりも気さくで話しやすかった。私が敬語になるのはまあ、置いておいて。

「璃々ー起きてるー?」

今日も瑠璃がやってきました。

「うん、はいつていいよ」

「おはよう、璃々。朝ご飯食べよー!」

返事を返して椅子から立ち上がる。

まだ日記を読み終えてないけど、今日一日くらい、許してもらおう。

広い廊下に出て歩く。

「ねえ、璃々。アレ、大丈夫かなあ」

そう、一月一日は本当なら暁の本家に行く日。

でも、今幻想郷だし。知らんな。

「まあ、大丈夫でしょ。お父様もお母様もきつといないし」

「そうだといいけど。でも、青空くんとかましゅちゃんとか来るんじゃないかな？」

「あー。まあ怜が何とかしてくれるって」

「ごめん怜！と心の中で謝りながら歩いていると、向かい側から咲夜さんが歩いてくる。

咲夜さんは、私たちがいなくなつてからかなりたつてからこの館に仕えに来たらしい。どうせあのレミリアお姉さまのことだ。きつと自分の能力がどうだとか言つて、運命だどうとか言つてさらつてきたんじゃないか。

…だとしたらお姉さま怖いな。

「おはようございます、お二人とも。あけましておめでどうございます」

「うん、咲夜さんおはよう。あけましておめでどうございます」

「おはようございます、あけましておめでどうございます。咲夜さん、何か手伝えることはありませんか？」

挨拶はリリエラ時代でも暁家でも散々言われたので大丈夫。

それより、いつもやってもらってばかりだから、少しくらい咲夜さんを手伝わないと。

「いえ、大丈夫です。お二人は先に大広間へ行ってくださいね」

「うん、わかった」

瑠璃が先に歩き出したので私も歩き出そうとしてもう一度咲夜さんの方を見上げる。

…目が怖い、私ナニカしたかしら。

「璃々？まだ？」

もう廊下の突当りまで進んでしまっていた瑠璃に追いつくため、早歩き。

「どうしたの？まだ眠い？」

「いや、なんでもない、って、璃々行き過ぎ、ここだつてば」

「あ、ほんとだ」

「もう、まったく。開けるよ？」

「うん、お願い」

昔は重くて動かせなかった古い扉は、この数百年で新しいものに変えられていた。

この前起こした異変で荒されたとかで、傷だらけだけど。

「お姉さま、あけましておめでとうございます」

「あけましておめでとーございますー！」

私と瑠璃でそう言いながら大広間に入る、すると。

「うーん、帯がきついわねこれ、あ、リリイ、ルリイ、おはよう」

上が着物、下がスカートみたいな感じの、いわゆる着物ワンピースとやらを着て椅子に座っているレミリアお姉さまとその後ろでほほ笑む咲夜さんがいた。

あれ、咲夜さんさつきすれ違ったのになあ。

「お姉さま、私も来たわよ」

後ろからフラン姉さま。珍しく地下から出てきたらしい。

「おはよう、みんな。今さつき起きたばかりで眠いわ、早く朝食食べましょうよ」

「あ、ええ、そうね。さあ、みんな座って。咲夜、美鈴呼んできてちょうだい」

「はい、かしこまりました。」

そういつて咲夜さんは大広間から出ていく。

「フランお姉さま、あけましておめでとうございます」

「あけまして？何それ」

「日本の文化です。一年の初めの日を祝う言葉みたいな感じだと思えますけど…」

「ふうん。あけましておめでとうございます、リリイ」

「うん、そんな感じ」

フラン姉さまははにかみ、嬉しそうに言う。

「面白いわね、それよりお姉さまはなんでそんな恰好をしているの？」

「咲夜に着せられたのよ。これ見た目より締め付けてくるのね…」

「あ、パチエ、おはよう」

「あら、フラン、おはよう。璃々と瑠璃も」

パチエとそのしもべみたいな感じになつてゐるこあだった。

「こゝに最初に会つたとき、「パチユリー様！こんな人私知りませんよ！誰ですか！」と言われ傷ついたりしたりもあつたけど、意外に仲良くやれている。

「私は!？」

「だってレミイ、あなたさつき廊下で会つたじゃない」

そんな話をしていゝと、咲夜さんが美鈴を連れて戻つてきた。

「連れてきましたよ、お嬢様」

「えへへ、おはようございます」

昨日瑠璃から聞いたはなしだけど、どうやら美鈴は咲夜さんという完璧な存在に負けて門番になつたらしい。

それと、門番と言つてもほとんどの客が門以外から入るからいる意味がなく、大体は昼寝してるとか。

「美鈴、おはよう！今日は大丈夫？」

「あ、瑠璃さん、大丈夫ですよ。いつもの時間に」

「うん、ありがとう！」

瑠璃さん!?

まあ、多分瑠璃が「今の私はルリアじゃない！」とか言つて美鈴に瑠璃で呼んでもらうことになつたんだろうけど。

そういえば、庭の花はほぼ全部美鈴が育てたとか言つてたな。凄いな美鈴。

「美鈴も咲夜も席について、食べましょ。」

食卓に目をやると、定番のおせちから、ローストビーフ、大きなパンなど、たくさん並んでいる。豪華だな、食べきれるのか。

「はい、いただきます」

「「「「「いただきます」」」」」

おせちの中身をのぞいてみると、いたつて普通……じゃなかった。

「咲夜さん、これは？」

「幻想郷でのおせちです。霊夢の作つているところを見て、ちよつと作り方を盗み見てくださいんですけど……」

瑠璃が不思議そうな顔をして聞く。

「幻想郷には魚とかいないの？」

そこか。盗み見てきたあたりじゃないのか。

「いえ、魚はいますが、海がないので大きなものはなくて…」

「鯛とかエビがないのはそういうことなのか」

「すみません、お肉で我慢していただけると…」

「咲夜さん、瑠璃は魚とかは苦手なので内心喜んでるんで大丈夫です」

「そうだったんですか。」

「別に私苦手なわけじゃ…ないし」

ちよつと瑠璃がふくれている。ごめん瑠璃。

「それより、レミイはなぜそんな格好しているの？」

「そうだ、パチエはその話が終わってから来たから知らないのか」

「咲夜が用意したのよ。あ、一応フランとリリイとルリイの分もあるけど。」

「着ないわよ」

「着ませんからね」

フラン姉さまは私と同じ意見だったが、瑠璃だけ違った。

「レミリアお姉さまと同じの？着る着る！」

「はっ。」

「よくいったわねルリイ！咲夜、食べ終わったら持つて来てちょうだい！」

「はい、かしこまりました」

その後、一日、レミリアお姉さまの着せ替え人形になった瑠璃であった。

く フランドール視点く

朝食を食べ終え、また地下室に戻る。

食ぶなくても生きていけるし、食べる必要なんてないけど、またくだらない一年が始まるんだから、最初の一日くらい、みんなといっしょにいても許されると思った。

やっぱり。やっぱりそうだった。

「リリイは、あんなんじゃないよね」

今日はどうやら来ないようだ。

あの番人いつでも暇なくせに、自分だけ暇つぶしして、私になにか言ってやりたいときにはいないんだから。

「ほんつと、勝手なんだから。」

「フラン姉さまー？いるー？」

上の方から声がする。

「いるわよ、今行くわ」

こんな薄暗いところに入れるわけにいかない。

一応偽物であっても顔立ちも声もリリイそのものだから。

「ううん、私が下りるわ」

扉を開くとリリイが入ってくる。

「お邪魔します、わ、何も変わってない」

「ええ、埃っぽいけどね」

「あのね、姉さま、話があって」

「なに？あ、ここに座って」

埃をかぶっていたソファを魔法で綺麗にして座らせる。

「あのね、私、リリイ……リリエラじゃないの。まだ完全じゃないの」

まさか、リリイの方からそのことを言ってくると思わなかった。

「うん、知ってるよ」

「だから、リリイ、って呼ばないで。まだ終わってないから。璃々、って呼んでほしい」
「なんで。」

アナタはリリイそのもの。顔も、声も。癖も何も変わってはいない。外側だけならリリイでしょう。

「うん、わかった」

ありがとう、と言ってリリイ、いや、璃々は部屋を出て行った。
扉へ歩いて行って、鍵を閉める。

また、素直になれない自分がいることに気付いて怒りがこみあげてくる。

それと同時に、すごく悲しくて寂しい気持ち。

誰か、こんな私を救ってちようだい

お願い。救ってほしいの。

でも、そう願うときに、番人は来ない。

あいつが来るのは、私が不安定なとき。

あれ、もしかして。

番人は、私？

「そんな、わけないものね。昔、リリイと地下を探検したときにいたあの小さな子供のようなあいつが番人なんだもの」

何故叫ぶのか、まだ誰も知らない。

（瑠々視点）

その夜。私たちはパチエの呼びかけで大広間に集まっていた。

集まったのは、私と瑠璃、レミリアお姉さま、パチエの使い魔の小悪魔ちゃん、咲夜さんと美鈴だった。

「あれ、フラン姉さまは？パチエ」

「フランならさつき部屋に呼びに行つたとき返事がなかったから」

どうしたんだろう。体調でも悪くなったのかな…後で部屋を覗いてみよう。

そうだ、その前に。

「パチエ、なんでみんなを呼んだの？」

「あ、それ私も気になる」

「そうね、パチエ、教えてちょうだい」

私、瑠璃、レミリアお姉さまの順にパチエの方をむく。

「今ここに集まってもらつたのには二つ理由があるわ。まず、二人の呪いに関して。」

「ああ、双子の呪い。あれの解き方が分かつたの？」

「解き方自体は二人がここにいるから半分以上は解決してるわ。後は番人をこの館の何処から探し出すことなんだけれど、一つ問題が。」

「問題って？ 見つけるだけじゃないの？」

もしかして？

「リリイ：璃々はわかったみたいね。」

「ごめんなさい、あれは私のミスだね」

「気にしなくてもいいわ」

「ねえ、二人とも何の話？」

意味が分からない、といった感じで瑠璃が首をかしげる。

「双子の呪いを解くために璃々がかけた呪文保護術式が、番人のかけた期間呪文消去術式を発動できなくしちやってるの」

「え？ なんて？」

「あのね、瑠璃、パチエが言ってることを簡単に言うと、昔かけた術式のせいで本来の術式が使えなくなってるの」

「ふーん。 って、え!?! それ大丈夫なの？」

「それで、続きは？」

レミリアお姉さまもようやく理解したようだ。よかった。

「璃々がかけた術式を解けば、呪いは解かれるわけなんだけど、今の璃々は魔力とかその他諸々を術式によって封印されてる」

「ほうほう、で？」

「璃々、これも簡単に言おうと、呪いをが解かれるまで魔力が戻ってこないんだよ」

「うん？え、どゆこと？」

「だから、呪いが解けないと呪いは解けないってこと。番人の場所がわかるのは璃々だけなんだから」

「え？」

あ、瑠璃が固まった。

「っていうことはつまり、番人の方で解除してもらわないと呪いは解けない、ってことよね」

後ろの方から声がした。フラン姉さまだった。

「フラン、何か知ってるの？」

「うん、知ってるよ。番人が呪いを解く鍵を持つてる。」

「それじゃあ、何とかして番人から鍵を借りればいいんですよね？」

美鈴がようやく口を開く。

「鍵を欲しかったら、私と交換だよ」

「「「「「え？」」」」」」

みんな同時だった。

フラン姉さまはふわりと飛び上がる。そして。

「私と、私の体を引き換えに、鍵をもらってよ」

「フラン！降りてきなさい！フラン！」

レミリアお姉さまが椅子から立ち上がり、フラン姉さまのもとへ飛ぼうとその黒い翼を広げる。

「そうすれば、リリイは、リリイは戻ってくる！だから！」

「フラン……？」

フラン姉さまは、泣いていた。

それを見てか、レミリアお姉さまは飛ぶことをためらう。

「だからっ！私を！」

「だから、フランお姉さまが犠牲になるっていうの？」

瑠璃だった。

瑠璃の目じりにも涙が浮かんでいた。

「っ、そうだよ！それでいいの！」

「どうして、いいと思うの？」

瑠璃は椅子からゆっくり立ち上がり、フランお姉さまのいる方へ近づいていく。

「みんな私なんて嫌いなもの！ただ壊すことしかできない私が！そうしたらリリイとルリイは戻ってきて邪魔な私は消えるわ！」

「みんながどう思ってるかなんて知らない！それでも、私はフランお姉さまのことは好きだし、璃々もそうだよ！」

いきなり大声をだす瑠璃。それと恥ずかしいからやめてくれ。

「なにも知らないくせに！」

フラン姉さまが叫ぶ。それに負けじと、瑠璃が声をはりあげる。

「そうだよ、私は何も知らない！呪いが何かなんてわからないし、まず私が吸血鬼の妹なんて言うのも夢だつてまだ思ってる！」

それでも、璃々とここに来て、たくさん新しいことを知った！私を待つてくれてる人だつている！同じように、フランお姉さまのことを待つてる人もいるの！」

「っ！そんなの、嘘っ」

「嘘じゃない！嘘なんてつかないっ！だから！犠牲になるなんて言わないでっ」

フランお姉さまの、握りしめた左の拳から力が抜けた。そして、泣きながらこう言った。

「お願い、パチエ。私を閉じ込めて。もう誰も、傷つけないように。」

「つ、わかった」

「ちよつとパチエ！勝手なことしないで！」

「レミイ！姉ならわかるでしょ！この子はこれを望んでる！」

なんか喧嘩が始まつてるんだけど。収集つかなくなりそう……

パチエが呪文を唱える。パチエの周りにたくさんのオーブが浮かんで、ぶつかって眩しい光を出す。

そして、四角い箱が出来て、フラン姉さまを包んで。

「またね、璃々」

消えた。

その後、みんなは何も言わずに部屋から出ていく。

瑠璃は先に戻るね、とだけ言つて帰つたけど。

残つたパチエに聞く。

「ねえ、パチエ。フラン姉さまは何処に？」

「地下牢。いつもの地下室じゃないわ。降り方は多分私しか覚えてない」

地下牢……昔、儀式の間に行く途中にあったあの鍵のかかった部屋のことかもしれない。でも、記憶を封じられてるから、行き方が思い出せない。

部屋に戻ろう。もっと日記を読んで、呪いの解き方を考えなきや。今できるのは、それしかない。

それは、月のない夜のことだった。

キャラ紹介 part 2

リリエラ・スカーレット

人間としての名前は暁璃々。スカーレット家の三女、双子の姉。

双子の呪いがかけてられていて、それを解くために日々奮闘中。

魔術は得意な方だが残念ながらまだ使えない。

フランが「あんなのリリイじゃない」というのは、

記憶やそれによって出来上がった性格も封印されているから。

紫に似た色の髪と目。フランと色違いの服。紫と白を基調としている。

幻想郷に来てから黒の目、黒髪が少しずつ元の色に戻ってきている。

お友達作りは全部瑠璃任せだったため、コミュニケーションベタ。

レミアアのことを「レミアリアお姉さま」フランのことを「フラン姉さま」と呼ぶ。

大体「リリエラ」「リリイ」「璃々」で呼ばれるが、変なあだ名をつける輩もいる。

：ちなみにリリエラはいろんな言語を瞬時に理解することができる。動物の言葉

もわかるとか

『形・物事を操る程度の能力』

この能力は使用時と非使用時を切り替えられるが、使用時には体力と魔力、周囲の魔力さえも吸収されてしまう。本人にはタブが付く形で見えており、そのタブは近づかなくても使用でき、指の動きで操作できる。事象でさえも書き換えることができるが、事象変換には大量の魔力を消費するのに対し、小さなことしか変えられない。レミリアの下位版みたいな物である。

ルリア・スカーレット

人間としての名前は暁瑠璃。スカーレット家の四女、双子の妹。

双子の呪いがかけられていて、呪いの解除のためにかけられた魔法で

記憶や魔力、容姿などが封印されている。

いまだに能力が開花していないため、現時点では一番役に立たない普通の女の子。記憶力は普通の人間の3倍。それがばれたくないのでいつもちよつと抜けた子を演じていたらしい

レミリアと同じ色の髪と暗い蒼目の。レミリアと色違いの服。空色、白を基調としている。

リリエラと同じく、幻想郷に来てから黒の目、黒髪が少しずつ元の色に戻ってきている。

圧倒的コミュ力。五分で友達を作れる。

お姉さま方には「レミリアお姉さま」「フランお姉さま」「リリイ」と呼ぶ。

ルリア自身は「ルリア」「ルリイ」「瑠璃」で呼ばれるが、変なあだ名をつける輩もいる。

『光と闇・色を操る程度の能力』

この能力はその名の通り、光と闇、色を操れる。闇に関してはルーミアの上位版。自分の周りを闇に覆われていてもちゃんと視えている。光に関しては、よくわかっていないが指先を発光させることで周囲を照らしたり、ランタンなどに仮想の光を閉じ込めることもできる。色は、物の色を変えることが基本。自分の衣服や髪の色を変えたりして遊んでいる

呪いの番人

まだよく知られていない存在。紅魔館の呪いの司祭的な存在。

一説では、何千年も前の双子の片割れとか。

気まぐれだが、策士でもある。

リリエラ、ルリアが呪いを解くには必要不可欠である。

フランを乗っ取ろうと考えているのか、はたまた何なのか。

とにかく、一度幼少期のリリエラに渡した鍵をまた取り戻して自分で持っているのは確か。

今のところ一番の敵。